

# 『東京地学協会報告』(明治二一三〇年)

— 明治前半の日本地理学史資料として

石田龍次郎

明治十二年(一八七九)四月、東京地学協会という団体が創立されて今年まで九十年、刊行物を連続して発行している。そのうち明治十二年から三十年春まで『東京地学協会報告』(第一巻—第一八巻)を刊行し、明治二十六年一月から『地学雑誌』(第五集第四九巻)を協会の名で刊行することになり、今日に及んでいる(一九六九年の初号は第七八集第六七八号にあたる)。

本稿においては前者をみながら、明治前半の日本における地理学の状況・思想・内容などを検討しようと思う。現在、この『協会報告』の完本は少ないので、多少詳しく書きのべておきたい。

- (1) 拙稿、東京地学協会編年史稿(地学雑誌、一九六九年)に九十年の資料的事実をまとめてある。協会の事業のみならず、その性格をもうかがうことができる。
- (2) 『地学雑誌』第一集から第四集まで出した地学会という団体が、協会に吸収合併された経緯は後述するが、明治二十六年より四年間、『東京地学協会報告』(同年より季刊となる)と『地学雑誌』(月刊)とが平行して協会から刊行されていたのである。
- (3) 国立国会図書館と慶応大学図書館に完本があり、東京地学協会には一〇・一一の両巻が欠けている。

## 一 東京地学協会の成立の事情

どういふ理由で、またいかなる目的で、東京地学協会は設立されたか。『協会報告』第一年会(明一三・四・二二)記事によると、社長北白川能久親王の開会の演説に

東京地学協会設立ノ起原ハ、現今、本会ノ幹事タル渡辺洪基氏會テ歐洲ニ在リテ、維也納府勅立地学協会ノ社員タル日、地学協会ノ本邦ニ闕クヘカラルヲ熟思シ、客歳春ニ至テ之ヲ現今ノ副社長榎本武揚、社員花房義質ノ二氏ニ謀ル、二氏モ亦夙ニ此舉ニ志アルヲ以テ相共ニ尽力センコトヲ期ス、適々現今ノ副社長鍋島直大、幹事長岡護美二氏歐洲ヨリ還ルニ會ヒ、渡辺氏一日鍋島氏ヲ訪ヒ談此事ニ及フ、同氏モ亦タ英国竜動ニ在テ長岡氏ト共ニ其勅立地学協会ノ社員タリ、夙ニ前三氏ト其感ヲ同セリ、因テ欣然共ニ俱ニ力ヲ此ニ尽サンコトヲ約シ、五氏各其朋友ニ謀ル、日ナラスシテ同志ノ士十数名ヲ得タリ……」

とあるように、ヨーロッパの地理学会にならって創設したものである。そのなかでとくにイギリスの Royal Geographical Society を範としているところが多いのは、会則や会員の構成・性格に示されている(後述)。

(4) 東京という地名をつけたのは、ヨーロッパで全国各地に学会があり、それぞれその都市名を冠していたのと同じ。後年明治二十六年に東京大学を中心に地質学会ができたときも、東京とつけている。もともと当時、同専門の団体は他になかったが会員は日本各地に散在しており、地質学関係の教室が京都・仙台その他にできて、東京地質学会で通用していた。東京というのは、なにも東京大学の卒業生の団体を意味せず、東京に事務所をもつ全日本的な学会として世界に通用していたのである(昭和になってからこれが日本地質学会と改名したのは、当時の國粹的情勢からか、あるいは東京以外の諸大学の地質学者が多くなって、文句が出はじめたものか)。

理科系の研究団体は明治後半、大正期に帝国大学が各地にできて、出身大学を論ぜず、全日本に単一の学会(日本動物学

会、日本物理学会、等々)をなすものが多く、この点、人文・社会系の学会は同種のもので大学ごとに分立するのと類を異にしている。これは自然科学系にはながく思想的な発展を同じうするものが多かったことに關係しているのであるうか。

(5) 『協会報告』は一年十回(七月八月休回)の(例会の)演説記事を、毎月四六判二〇―四〇頁の冊子にして會員に配布するほか、翌年四、五月のころに年会を開き、その記事を一冊分出して一巻とする。

(6) 当時このような団体では社長・副社長といったが、明治十六年の第四年会で会長・副会長に改め、明治三十三年社団法人となったとき従来の会長を總裁とし、新たに理事五人をおきそのうち二人を会長、副会長とするようになった。

(7) 北白川宮社長の演説に出ている東京地学協会首唱の五氏のこのときまでの経歴をみると

渡辺洪基(一八四八―嘉永元年生) 越前武生の人。漢学蘭学を学び明治二年大学少助教、四年、岩倉使節団の幹部となって渡欧、五十八年、オーストリアに書記官として滞在、九年、帰国後、農工実業家の産業進歩の会、万年会を組織する。太政官及外務省大書記官となる。

榎本武揚(一八三六―天保七年生) 幕臣、文久元年オランダ留學生となり六年間在留、明治元年函館に赴いて戦い、三年、下獄、五年、開拓使四等出仕、明七・一、海軍中將となり特命全權公使としてロシアに赴き、千島樺太交換条約を結ぶ。明一二・二条約改正取調御用掛、明一三・二海軍卿兼外務大輔議定官。

花房義賀(一八四二―天保一三年生) 岡山にて蘭学、洋式砲術を学び岡山藩京都周旋方となり長州征討・兵庫開港につくす。

慶応三年三月フランスに留学しイギリス、アメリカを経て明一・一〇帰国、外国官御用命掛、三年、柳原前光に従い清国に行き条約を結び五年、朝鮮に赴き日韓貿易を議し、代理公使としてロシアに赴き千島樺太交換条約にもたずさわる。九年朝鮮代理公使、一三年朝鮮弁理公使。

鍋島直大(一八四六―弘化三年生) 佐賀藩主。明治元年議定職、横浜裁判所副総督、外国官副知事を経て、四年鹿藩後、イギリスに留学八年間。一二年、外務省御用掛、一三年、特命全權公使としてイタリヤに駐在。

長岡護美(一八四三―天保一四年生) 熊本藩主弟。幕末、肥後の牛若と称されて活躍、明治元年参与職、軍務官副知事、熊本藩大参事等を経て鹿藩後、五年アメリカへ四年間、さらにイギリスに二年間在留、一一年秋帰国、一三年特命全權公使とし

でオランダに赴く。

東京地学協会における「地学」 最初の疑問は、渡辺洪基がウインにおいて、鍋島直大・長岡護美がロンドンにおいてそれぞれ会員であった Geographische Gesellschaft, Geographical Society を摸したものであるのに、これを「勅立地学協会」と訳し、なぜ素直に geography の訳語そのままに地理学協会と名付けず、「東京地学協会」としたのであるかということである。地学とは何か、地理学と地学とはどちらがうのであるか。

この疑問に対しては二つのことが考えられる。当時、明治一〇—二〇年代、地理という言葉は中国伝統の国郡誌(方志)をさしていたと思われること。それは文献を博く索捜することによって地方国郡の沿革をしらべ、一定の規準によって現状を記載することであり、その史官的思想によって、日本では明治初期から太政官地誌課あるいは内務省地理局において、「皇国地誌」の編纂を全国的に進行せしめていたのである。<sup>(e)</sup>これが「地理」という一応固定した意味であったかと思う。

もう一つは、西洋伝来のゼオガラヒーという言葉は、幕末には五大洲の形状、人種、各国の政体・都府・軍備等を主とする諸国誌を意味し、やがて慶応から明治初期にかけては、国尽し・往来もの風の世界知識を意味し、さらに学制発布とともに文部省や師範学校にとり入れられて、教育用の素材となって重用されたものを意味したと思われる。

このような意味内容で理解された地理以外のものを、渡辺洪基らはヨーロッパで Geographical Society, Geographische Gesellschaft でみて、それを日本で必要と感じたのでなからうか。そのものを日本語であらわすのに、従来の「地理」では誤解もおこるから、別の言葉として「地学」<sup>(g)</sup>を使い、ヨーロッパのものも、また今新たにつくる日本の

ものも「地理学協会」ではなく「地学協会」をあてたのであろう。

(8) 拙稿 皇国地誌の編纂——その経緯と思想、一橋大学研究年報 社会学研究 八、一九六七年。

(9) Cornell's Primary Geography をそのまま翻刻して「地学初歩」(渡辺一郎、慶応二年)とし、これを邦訳して「万国地学和解」(宇田川榕精、慶応四年)となったように、地学という語は江戸時代末期には「地学正宗」「地学浅釈」などという訳書名とともに使われていた。明治初期にも文部省の学制の小学校の課程にも地学大意というのがあったが、前記コルネルの書は文部省、師範学校および各県で「地理初歩」と改められて自然地理の部分が出版された。こういう風に地学は地理または地理学ととくにちがった内容をさしているのではなかった。しかし渡辺洪基らは地理と地学とを別種のものとして使っているのである。

## 二 東京地学協会の性格

東京地学協会はどのような性格をもった団体として創立されたのであろうか。会員・会則・活動などいろいろな点でイギリスの Royal Geographical Society に似たところが多いのであげてみる。

**会員の構成** 第一年会の記事によって、明治十二年四月十八日の創立時の会員の身分をみると、次のごとくである。

皇族 二

華族 二〇(内、公使 二、議官兼賞賚局副總裁 一、大給恒、省出仕・省御用掛 四、蜂須賀茂韻・松平信正・武者小路

実世・万里小路通房、県令 一、他は華族という身分のみ)

参議・卿 八(榎本武揚・佐野常民・大隈重信・井上馨・山田顕義・大木喬任・山県有朋・大山巖

軍人 二七(陸軍 九、海軍 一八、また将官 九、他は大佐より中尉まで)

『東京地学協会報告』

- 官吏 二四(大書記官・権大書記官 九、少書記官・省大秘書・検査官等 六、御用掛 五) 副島種臣・川本清一・塚本明毅・荒井郁之助・河田龍、有位者 四)
- 公使 二 花房義質・吉田清成(前記、華族のなかの公使は鍋島直大・長岡護美)
- 編修官・教授・判検事 六(教授は東京大学医学部教授)
- 民間 七(新聞社長 二、他は記載なし)

\* これは身分が記載なく、正七位(三人)従六位(一人)としるしてあるもの、不明のものもあるがかりに官吏のなかに入れておく。

今のセンスから考えて、職業的な学問研究に関係ありそうなのは地理局御用掛と編修官(塚本明毅、荒井郁之助、河田龍、北沢正誠、川田剛、巖谷修、重野安禪)とそのほか検査官小野梓ぐらいなもので、民間人には日報社長福地源一郎、曙新聞社長中村武雄の外は、福沢諭吉、丹羽雄九郎、町田実一、駒井重格、藤井能三の諸氏である。すなわち華族・軍人・行政官吏・外交官、このような学問研究を本務としない人達、そして社会の上層階層に属する人達が、会員の主要構成部分をなしていたというのは、後に述べるように当時の地理学、あるいはこの協会の目標とする地理学・地学の性格の反映である。

(9) 福沢諭吉は四月十八日の選挙会で十二名の議員(評議員)の一人にえらばれたが、八月、駒井重格とともに退社している。退社まで四月、五月、六月と三回例会があったが、駒井は一回も出席せず福沢は六月に一回出たきりである。資料の上から福沢と協会とはあまり関係がなかったようである。そのほか一年間の退社者は副島種臣(宮内省御用掛兼一等侍講)、林董(工部大書記官)、重野安禪(一等編修官)その他、華族三である。

世間では東京地学協会の創立ならびに事業活動について福沢諭吉が大いに関係しているように考えているものが多いがじっ

さいはそうでなかったのではないか。福沢の全集などにも見あたらずに、また肌合いからいっても合わなかったのである。「地学協会は我国に古き歴史ある学会なり、其初期は加藤弘之、福沢諭吉、池田謙吉、大鳥圭介先生等の会にて宮様を総裁に頂き宛然外国の学士院 Royal Academy に該当し、当時の会員は現代の帝国学士院会員と異なり大に世間より敬意を表せられたり」(小藤文次郎、地学雑誌の由来、地学雑誌、四二巻五〇〇号、昭和五年)というのも思いちがいであらう。小藤文次郎はわが国最初の地質学者で、明治十二年東京大学地質学科卒業、ドイツに留学、十九年帝国大学教授となり、爾来三十八年、大正十年退官まで地質学界を主導した人であるが、東京地学協会には最後まで深い関係がなく、むしろ対立的立場にあった。文中の加藤弘之、池田謙吉は『東京地学協会報告』の毎月の記事や入会者、年会記事などでみるかぎり全く無関係であり、大鳥圭介はじめて地学協会に出たのは第五年目(明治十六年六月)であり、その後には評議員となりやや准幹部的役割をはたしたようである。

なお創立より満一年後の明治十三年四月十九日までの入社会員五六人を、前例のごとく区分すれば

参議 一 伊藤博文

軍人 五(将官なし)(二等軍医正 石黒忠恵をふくむ)

公使・総領事・在外書記官 五(内、議官兼公使、陸軍少将兼公使、各一 柳原前光・井田謙)

華族 六(内、御用掛 一 松平忠礼、他は華族とのみ)

官吏 一九(大輔・少輔・大書記官 八(衛生局長長与専齋をふくむ)、少書記官、出仕、権少警部等 八、御用掛 二 諫早千吉郎・大隈英麿、職名記載なし 一 青江秀)

民間 九(社長 二、司法代言人 一 星亨、その他は職業記載なし)

外国人 一一(英国人 五、ドイツ人 三、清国人 二、フランス人 一)

\* あまり知名でない広業商會社長、博文社長。そのほかに、商業・貿易界に名の知られている高島嘉右衛門が職

名無記載なのは、会社形態でないためか。

\*\*\* 大清欽差書記官<sup>ツツカガキ</sup>麦嘉締<sup>マカガキ</sup>を清国人のなかにいれておく。

創立社員とちがうところは軍人・華族の入社は少ないのに比し、外交官・官吏や民間人が比較的が多いことである。しかしもっとも大きな差異は、外国人が多数入社したことである。そのなかにはエルネスト・サトー（イギリス公使館二等書記官）、バシル・ホール・チャンパレン（海軍省雇）など、日本と関係の深い人もいるし、ドイツ国弁理公使、大清欽差書記官、（外国新聞社）通信員などもいる。これはおそらく明治十二年九月のノルデンショルドの歓迎会などにより、本会の存在が在日外国人の間に広まり、日本の Geographical Society が設立されたとして入会したものであろう。この点、あるいは日本人会員の入会の動機と多少ちがうかもしれない（例会にも時々、これらの外国人会員が出席しているが、すべての外国人がサトーのように日本語を解したとは思われない）。

協会の会員は第一年会のときには、入社総数（創立会員とも）一五三人、うち外国人一人、退社九人、死亡一人、現在一四三人であったが、以後、入社数は退社・死亡数をやや上廻る程度で、地学会を合併する前年の第十三年会（明治二十四年度）の報告で一六〇人（外に在外の主として外国人よりなる通信会員二人）であったから、いかに小じんまりした会であったかがわかる。この会員の構成・性格は明治二十五年春の地学会との合併によって著しく変ることになる。

**特権的庇護** 東京地学協会は皇室にパトロナイズされるイギリスのロイヤル・ソサイエティを範とするつもりか、

明治十二年三月、まず会の規則立案中に鍋島直大・長岡護美が「会員ノ旨ヲ体シテ」北白川能久親王に社長就任を請



い承諾を得ている。創立時の社員九六名中には、北白川宮社長（陸軍中佐）のほかは皇族としては東伏見嘉彰親王（陸軍中將）があるから、軍人階級の高下によつたものではない。明治十五年には有栖川宮熾仁親王、伏見宮貞愛親王が入社し、翌年にはこれら四親王を外国人三人（ノルデンショルド、前ドイツ公使、前ロシア公使）とともに名譽会員にしている。

初代社長（会長）北白川宮が明治二十八年、台湾の軍旅において薨ぜられた後は、閑院宮戴仁親王を会長（総裁）に迎え、敗戦の直前、その薨去のときまで戴いていた。大正期には成年に達した若宮を名譽会員に迎える風習もできたのは、みなこのロイヤル風であろう。ただしこれは、実質的には協会の事業や運営には関係がないことであつた。

しかし明治初期には、会員に華族や官辺の有力者の多かつたことと結びついて、他の学術研究団体にはみられぬ優遇を受け、また受けようとしていたことが見える。創立満一周年を前にして明治十三年三月、大隈重信・井上馨の首唱で臨時小集会を開き、「前途興隆の方法を議し」て、地学協会文庫および会場として建物のある地所拝領、並に補助金として若干円の寄付を宮内省に請願することをきめた。そして早速、この請願は翌十四年四月には宮内省より金一千円の恩賜金として実現しており、十四年十二月には靖国神社および遊就館が落成したので、協会の集會・文庫のために借用願を大山陸軍卿へ出しているが、この方は聞き届けられなかつた。<sup>(11)</sup>

(10) 当時の貨幣価値から考えて、一千元は相当の大金であつた。四十一年後、大部な『支那地学調査書』を完成し、天皇・皇后・皇太子に献納したとき大正十一年に「其会創立以来、事業ノ状況ヲ被聞食、思召ヲ以テ金千円下賜」せられたのとは、意味は全然ちがう。すなわち前の一千元は実質的庇護であり、後の一千元は榮譽的表彰であつた。東京地学協会と皇室や政府と

の関係もかわり、明治前期と後期の皇室と国民に対する政府の処理・態度を示すものであろう。

(11) 協会は創立後、四年間は神田錦町の学習院の一室を借用して文庫・事務室とし、例会はその講堂を使った。そして明治十五年八月、京橋区西紺屋町十九番地に二等煉瓦家屋五戸分を買入れ、三回修繕して大正震災のときまで使用した。

このようなロイヤルの特権的庇護は二十年代後半からは実質的に消滅して、たんに会長(総裁)宮を頂くというに止まることになった。初期にはしばしば例会の演説会に出席された北白川宮が、地方に師団長として赴任されて年会の演述も代読となり、やがて台湾で薨ぜられた後は、閑院宮会長(総裁)になってから全く形式に墮してしまい、年会(總會)に令詞を賜わり、副会長(会長)が恭しく奉答するという儀式にのみみられた。<sup>(12)</sup>

(12) 総会が内容のない儀式になると出席者が少なくなり、大正ころから総会の二か月位前の地学雑誌の巻頭に「総裁宮殿下台臨の儀、御治定あらせられ候」という会告が出るようになり、それでも出席者が少ないと宮様に対して相済まぬと、協会側では狩り出しにつとめた。わたくしなども昭和十年代、編集委員の末席に連らなっていたためか、モーニングコート着用、数分間の儀式に出ねばならなかった。

**財政的基礎** 皇室・官憲の庇護もさることながら、東京地学協会の事業活動のかなりのもは会員の努力による資金であった。創立時の規則によると、社員は入社金十円、年釀金(会費)十二円を要し、創立後、社員となるためには社員二名の保薦(紹介)を要した。入社は創立後七年を経て「規模大いに定まり維持の目途確立に付」廃止され、年会費は明治二十三年に半額の六円として「学者実業家の同志」を入れることにした。

明治十年代には入社金十円は一般社会人や俸給生活者にとつては、禁止的な高額である。年会費は雑誌代と同意語ではないといえ、『協会報告』一年十一冊分十二円はたとえそれが十一年後に半額になっても、明治二十年ごろの

他の学界雑誌が一冊十銭ないし十五銭であったのとは、段ちがいに高価なのである。

しかし協会はこの入社金と年醸金だけでは、とうてい満足でないとして創立後一年にして、前述、大隈重信・井上馨の首唱で御下賜金請願とともに、「皇族方ヲ始メ、華族並ニ本会社員其他ノ富豪者ヨリ本会前途保続ノ資金トシテ、一時金若干ノ寄付ヲ請願」し、また「有志ノ輩寄付金一時ニ難被行分ハ数度又ハ数月ヲ約定シテ本会ニ納付スル事」を決定した。第一年会における渡辺洪基幹事の報告によると

其金額ハ醸集ニ從テ消費スルモノニ非ス、相当ノ高ニ纏リタル上ハ大蔵省に請フテ公債証書ニ換ヘ、以テ本会永久ノ資本トシテ消費スヘカラザル事ニ定メ、之ヨリ生スル利子モ亦タ当分、常務ニ支用セスシテ積ンテ資本ニ加ヘ其利子ヲ以テ相当ノ事業ヲ為シ得ルニ至ルヲ期スル者ナリ

と述べている。高い入社金、高い年会費、さらに積立寄付金をためて、どのような事業を協会はしたか。何に資金を使ったかは後にふれるであろうが、普通の学術団体のような貧乏さはなく、富裕な団体であったことがわかる。

明治十三年三月二十六日にはじめての募金相談小集会を開いて、約一カ月後の四月二十二日の第一年会当日の報告で早くも、一時納付の申込は千五百円一人、千円一人、千円五人、九百円二人、四―五百円三人、一―三百円四人、計十六人（うち六人は非会員）、一万一千四百円に達しており、約定納付（年賦）の申込は五百円、三百円、百円、五十円、三十円等、その他の大部分は二―五か年の割賦で四十六人（うち非会員十人）にのぼっている。まことに盛んなりといわねばならぬ。発足匆々にして、すぐこれだけの資金の申入れがあるというのは、やはり新興の地学のためか、それとも宮様会長や有力な華族・高官のカオであるか。

(13) 一年後の第二年会(明一四・五・三)の受領総額は一時払、八六〇〇円、二一五年々賦(五〇一〇〇円)、一九四六円六六銭、合計一万〇五四六円六六銭であったから、申込とは多少へっている。

寄付金は保続資金として経常費とは別に計上されているが、第六年会(明一八・五・七)には「本会寄付金払納ノ儀、本年二月悉皆完結シ本会保続ノ方法確立シタルニ付、年会ノ日ヲ以テ宴会ヲ開キ寄付ノ諸氏ヲ饗シテ、聊其厚キヲ謝スルノ意ヲ表シ併セテ本会ノ隆盛ヲ祝スル事」とした。七年間の寄付金合計は二万〇四二〇円で、内わけは宮内省一〇〇〇円、一時払一万〇四〇〇円、割納九〇二〇円であった。(別の計算によれば明治十三年中の一時納九四〇〇円、明治十三年七月より十八年二月までの割納合計一万〇六〇〇円、それに宮内省の一〇〇〇円と合計して二万一〇〇〇円とある。)

いづれにせよ、経常費を賄う入会金、年釀金とは別に二万円余の資金が蓄積されて、これが七分金禄公債、金札引換公債、整理公債、定期預金等となり、第六年会(明一八・五)には利子累計(当籤金をふくむ)五八四七円余を生んでいる。協会の事業活動の大きな源であった。<sup>(14)</sup>

(14) ここで協会の毎年の会計報告から収入の部を整理してみると、別表のごとくである。すなわち保続(寄付)金で購入した公債・定期預金の利子は五―六年後には年釀金(会費)収入よりふえ、そのなかから毎年、図書購入費と『協会報告』の印刷費を繰入れていたのである(ということは、入社金および「禁止的」高額の年釀金を徴収しながら、別途会計の保続金から繰入れねばならなかったということでもある)。

**サロンの雰囲気** 右にのべたような会員構成で、資金にさして困らない東京地学協会がどのような活動をしたか。

その意図や学問的な内容性格については、後に詳しく述べるが、外観的にはまことに華やかなものがあることに気づ

東京地学協会財政（収入の部） 単位：円、銭位以下切捨

明治	年度	入社(会)金	年釀金	会館貸与料	保続金(寄付金)	利子(当籤金をふくまず)	書籍・印刷代へ繰入
	12	1	1290	1631			
	13	2	160	1077	1,0546	392	240
	14	3	117	1499	4073	1601	240
	15	4	45	1252	1881	899	480
	16	5	180	1354	174	2395	1274
	17	6	40	1060	212	1525	2459
					(累計 2,0420)		8401)
	18	7	70	894	245	1449	6102)
	19	8	(入会金 廃止)	796	230	1493	375
	20	9		747	308	100	1773
	21	10		720	334		1681
	22	11		651	271		1557
	23	12		4893)	399	500	1296
	24	13		372	433		1423
							7004)

- 1) 十年紀祝会費をふくむ。
- 2) 煉瓦家屋代金、月賦上納の残額 300 余円を差引いた額。
- 3) 年釀金半額となる。
- 4) 書籍印刷代のほか、年会々費をふくむ。

く。

明治十二年五月三十一日土曜日午後三時、第二回の例会を開いて二つの演説があったが、それが終って横須賀造船廠でつくられた軍艦清輝号が十一か月、航程二万七千里をめぐって帰国したので、艦長井上良馨以下乗組士官十九名を午後六時から上野公園精養軒に招き、社長宮ほか社員三十八名が出席して歓迎宴を来会者の釀金を以て開いているし、同年九月にはスエーデン汽船ウエガ号が史上はじめて北氷洋・ベーリング海峡を通航して横浜にきたので、ドイツ・アジア協会、イギリス・アジア協会と合同して隊長ノルデンシヨルド博士・隊員及び乗組士官を工部大学校に饗応宴を設けている。東京地学協会からは社長宮ほか四六名、英アジア協会六〇名、独アジア協会二八名の出席で、各人より祝詞あり乾杯を重ね、楽隊を戸外よ

り階上にうつして舞踏会を催し、夜半十二時を過ぎたとある。鹿鳴館時代の開幕の数年前のことである。(詳細は『協会報告』第一年第四号に記事、一―二三頁)。

また第一年会(明一三・四・二二)は高等師範学校において開き、諸種の報告、役員の選挙を終つてから、午後六時、昌平館に宴会を開き、「当年会は第一回に当るを以て大臣・参議・諸省卿・各国公使・華族の内數十名、及び東京横浜両処の豪商数名を本会より招待せり。主客合せて二百五十五名とす。午後十時退散せり」という盛況であった(第一年会記事)。

第二年会(明一四・四・一六)は芝延遼館で午後八時から十一時まで、社長宮ほか社員三〇名、来賓六名で夜会を開くというシャレタことをやり、前年のごとく諸報告・選挙の後、当日の演説者福地源一郎、西徳二郎兩名とも欠席につき直ちに夜宴となり、陸軍々楽隊の吹奏があるという調子である。第三年会は新たにできた遊就館で、陸軍省より電気燈を借用し、靖国神社の園内に点燈し、第四年会は新たに購入した京橋区西紺屋町の煉瓦建の会館で開いている。以後だんだん地味にはなるが、第五年会(明治十七年春)から第十八年会(明治三十年春)まで、年会を協会の会館で開いたのと上野精養軒・後樂園・帝国ホテルなどで開いたのと、ちょうど半々である。

これは協会の規則の第九条(集会)の第三項に

(年会における)右演舌、賞与、人選(ハ撰挙)了レハ大議會ヲ開クヘシ、此大議會ニハ各社員及ヒ其朋友並ニ名譽アル内外人之ニ列スルヲ得ヘシ、此入費ハ別途トシ来会スル諸人ヨリ之ヲ払フヘシ

とあつて、大宴会が協会の当然なすべき行事であつたのである。いいかえればこの種の交歓が協会の目的の一つとし

て行われたとみるべきであらう。

これは単に年会の宴会だけでなく、毎月の例会でも、珍らしい演説者があると、終って必らず晩餐会を催した。たとえば露国・中央アジアの話をした西徳二郎を神田三河屋で（明一四・五・二八）、ベルシヤより帰った吉田正春・古川宜督の話のあと芝紅葉館で（明一四・九・二四）、農商務省地質調査所のナウマン氏の演説後、三河屋で（明一五・六・三〇）、欧亜周遊を話した北島道竜を築地精養軒で（明一七・三・二三）、米国軍艦の艦長ニカラガ運河開さく事業についての講演後（明二四・一・二七）盛大な宴会を開くという調子であり、また鍋島直大、長岡護美、柳原前光、井田謙、桂太郎、大鳥圭介、渡辺洪基、福島安正らの外国への赴任・帰朝などについても宴を催している。<sup>(15)</sup>

年会や例会の珍客の場合のみでなく、毎月の通常例会にも、この空気、すなわち演説の内容は後にも述べるように異国の旅行見聞談が主であって、これを「聞いて楽しむ」という要素があったと想像される。演説後、質疑応答も多少あったらしいが、何分にも会員たる聴衆（普通二十名前後）の大部分は研究者でないし、講演の内容そのものも研究の結果というよりは見聞談だから、学会でみるような討論を望むのは無理であり、そういうところに東京地学協会の目的のなかったことは後にわかる。鹿鳴館時代が近づくと、会員の夫人・令嬢も同行出席している。<sup>(16)</sup> まことに十八年後の現在でも稀なるハイカラな雰囲気である。

しかしこれは翻って考えてみると、日本の諸団体、とくに學術的団体としては稀有例外なことであるが、西欧社会の団体ではごく当り前のことであった。それをまねたのである。単に形式だけでなく、内容においてもイギリスの Royal Geographical Society の活動、あるいは地理学のあり方をまねようとしたのである。さて、それではイギリ

東京地学協会財政（支出の部） 単位：円

年度	明治	俸給	図書費	印刷費	饗応贈与	保続金(特別会計)	
1	12	461	23	282	133		
2	13	679	242	403	270		
3	14	607	355	644	342	700	京橋地所購入
4	15	497	200	571	235	999	" 修繕
5	16	746	141	1065	146	2374	修繕
6	17	774	124	587	110	2724	"
7	18	745	62	235	189		
8	19	579	62	445	32	901	芝車町地所購入 <sup>1)</sup>
9	20	568		339	54	300	煉瓦家屋代金月賦 上納の残額
10	21	595		342	362	1559	芝公園地所家屋購 入費 <sup>2)</sup>
11	22	544	74	316	249	2500	会館改築費の内
12	23	558	67	325	149	1499	" <sup>3)</sup>
13	24	650	14	321	98		
14	25	691	46	501	202		

一橋大学研究年報 社会学研究

10

- 1) 伊能碑建設用地。翌年この地所を 1300 円にて売却。  
 2) 芝公園内に図書館建築用として地所を買ったが、同年 175 円にて茶席一棟売却。なおこの地所は翌年、不要となって譲替え 535 円収入。  
 3) 借入金利子 93 円をふくむ。

スの地理学、また Geographical Society をどう理解したのであるかを、『東京地学協会報告』のなかから次にさぐってみたい。

(15) 協会の会計の支出の部をみると、饗応贈与は全部宴会費でもなからうが、少なくとも額に達している年もある。後述の調査嘱託の費用をもふくんでいるのであろう。人件費は月俸、雇給、小使に分れ三—五人を雇っているとみえる。筆墨紙、炭、薪、油、蠟燭、茶、弁当、車代、新聞、消防入足など詳細にしている。

(16) 『東京地学協会報告』には毎回の例会の記事に出席会員の氏名と同伴傍聴者の数が記されている。最初の同伴女性出席者は榎本武揚夫人で(明一九・一二・二一)、こえて翌年には児玉淳一郎夫人、渡辺洪基夫人、川田剛夫人・令嬢、それから、福島敬典、荒井郁之助、田辺太一、小笠原忠忱、花房義賢らの夫人である。これも両三年で止むし、またそれはたとえば福島安正少佐の印度紀行、志賀重昂の南洋巡航などのごとく幻燈のある晩で、他の出席者も平生の二、三倍の五〇—七〇名ときでもあった。



以上を要約するに、東京地学協会は当時の日本の他の学会とは類を異にし、「貴顕学会」<sup>(17)</sup>と評されるにふさわしいものであった。これを学会とみるから、種々の批難も出るのだが当時日本にあった諸学会、東京数学会社(明一〇・九創立、一七・二東京数学物理学会と改める)、化学会(明一一・四創立、会員二四人の研究団体、翌年東京化学会と改める)、博物友会(明一一・一〇、後の東京動物学会など)、日本地震学会(明一三・四、会員一七人のうち外人八〇人、日本とつけた理由か)、斯文学会(明一三・六)、東京植物学会(明一五・二)、哲学会(明一七・一)、人類学会(明一七・一一、のち東京人類学会に改める)等々とは、かなり異質のもので閉鎖的な社交的半学術団体とみれば問題はないのである。ただ地理学についてはこれ以外に、当時関係の団体がなかったのが不幸であった。

(17) 東洋学芸雑誌、一四五号に「貴顕学会の称ある東京地学協会」とある。青江秀が九州火山論を協会の例会(明一二・一〇・二五)で演説したときに「是等ノ原因ヲ考究シ以テ其由来スル所ヲ明知スルハ、我輩人民ノ上流ニ位スルモノノ負担スベキ義務ナリトイハザルヲ得サルベク」(『報告』一の一五)と記している。協会第一年度末の社員一四三名中、身分の記載のない少数者の一人、もし官吏であったとしても無位微官であった青江秀でかくの通りである。いわんや社員の大部分を占める華族・高官・軍人において、通常人民とは席を同じうせず位の気持があったことであろう。言い伝えによると大正末期においても、大学を卒業している専攻の士も官途にあっては、奏任官以上でなければ会員にはしなかったという。明治時代、「貴顕学会」と称されたのも当然である。

### 三 東京地学協会の初期の目標

東京地学協会が創立されてから九十年のうち、『協会報告』を刊行していた明治十二年から三十年までの期間、ど

ういうことを目標にして動いていたのだろうか。一貫した動向がみられると思ふが、厳密に言えばその最初の三年間、創立時の意図がもっとも明白に示されている時代について、東京地学協会が考へた地学Ⅱ地理学を検討してみよう。

**規則の制定** 東京地学協会設立の動機は先に述べたように、渡辺洪基、榎本武揚、花房義質、鍋島直大、長岡護美の五氏の首唱によるもので、明治十二年二月二十二日、上記五氏のほか伊達宗城（旧宇和島藩主）、蜂須賀茂韻（旧徳島藩主）、赤松則良（海軍少将）、桂太郎（陸軍中佐）、堀江芳介（陸軍大佐）、柳猶悦（海軍大佐）、梶山鼎介（陸軍少佐）、伴鉄太郎（海軍少佐兼大書記官）、北沢正誠（地理局?）、黒岡帯刀（陸軍大尉）、會根俊虎（海軍大尉）らが上野公園地内精養軒に集まり、本会設立の主旨を議し、鍋島・長岡・渡辺・桂・北沢の五人が規則立案委員となり、案なるに及んで三月二十一日、上記諸氏のほか河瀬秀治（大蔵大書記官商務局長）、小沢武雄（陸軍少将）、関義臣（判事）、山田行之（?）、牧野毅（陸軍中佐）、島弘毅（陸軍中尉）、竹添進一郎（大蔵権少書記官）らが学習院に会して討論議定したのが、次の規則である。規則は全部で九か条二二項になっているが、このなかから地学協会が何を意図したかをみよう。第一条、本会設立の目的と、第六条、探訪心得がその一つの鍵である。

第一条 第一 地学ニ於テ經濟軍務其他ニ関スル有益ナル事件ノ説明、本会ノ見聞ニ触ル、者アレハ、時々簡便ノ方法ヲ以テ之ヲ編纂出版シテ社員ノ講究ニ供シ及ヒ公衆ニ報知スル事（第二、地学に関する文庫を設けること、省略）

第三 探訪旅行ニ従事シ又ハ其他ノ旅行人ニシテ地学上ノ探訪ヲ為サント欲スル者ニ、本会ニ於テ経歴センコトヲ要スル地方、其地方ニ赴クニ最便利ナル方法、深ク探偵センコトヲ欲スル事物、特ニ探蒐センコトヲ欲スル博物学ノ事物、及ヒ地学ノ進歩ニ益アル報告等、本会ノ希望スル条件ヲ簡略ニ筆記シ心得書ヲ作り之ニ付托スル事（第四、各国の地理学協会との交渉、第五、

賞牌褒賞を与え勸奨すること、省略)

第六条 探訪心得 本会ニテ切望スル事項ヲ十分ニ探訪シ得ヘキ為メ、予メ探訪心得書ヲ作り、旅行人ノ之ヲ得ント欲スル者ニ与ヘ、且議員ニ於テ其件緊要ナリト思考スル時ハ之ニ若干ノ補助金ヲ与フルコアルヘシ

第一条第一項の「地学ニ於テ經濟軍務其他ニ関スル有益ナル事件」を發明発見することを期待しているのは、明治時代の、しかも政府要路の大官・軍人を会員としてゐる団体としては、ごく当然の発想であらうが、四月二十六日の創立第一回の例会で北白川宮社長の演舌もほゞ同じことを述べている。

「……抑モ地学ノ事タル内外古今ヲ論セス、經濟政治軍防、苟クモ一事ヲ為ス、皆之ヲ以テ欠ク可カラサルノ具トシ、官府ナリ人民ナリ力ヲ此道ニ尽シ、或ハ官府命シテ風土ヲ觀察セシメ或ハ人民私シニ游歴ヲ企テ山川ヲ跋涉スル等、地学ヲ講スルノ方法一ニシテ足ラス……社員ニ望ム所ニアリ、曰ク地学ヲ擴張スルナリ、曰ク取りテ用ニ供スルナリ、曰ク之ヲ助成スルナリ、地学ノ用、国内ニ在リテハ勸農ナリ勸工ナリ勸商ナリ運輸ナリ政治ナリ防禦ナリ、一モ之ニ由ラサルナク、外国ニ向ツテハ航海ナリ通商ナリ攻戦ナリ、亦タ之ニ由ラサルナシ、内富強ヲ謀ルヘク、外威徳ヲ伸フヘク、一モ地学ニ其資ヲ取ラスンハアラス、封建既ニ廢シ郡県漸ク成リ、況復、五州会同四海相通スルノ時ナリ、地学ノ用、広且大ナリト云フ可シ、社員諸君ニ望ム所ハ各々其為シ得ル所ニ就テ之ヲ勉励シ、本会ノ益盛大ヲ致シ以テ実用ヲ天下ニ見シコトヲ」

これは多分、幹事渡辺洪基の起草だと思われるが、具体的には第一条第三項および第六条で述べている「探訪」によつて、右の「經濟政治軍防」の目的を達成しようとしたのである。もつともこの規則は設立前の繰り方ではあるが、協会の事業のなかで国外の調査旅行の補助がかなりの重要性をもつようになるのも、この主旨からである<sup>(17)</sup>。

ただし第二条、学科区分で「本会ノ目的トシテ調査スル各科ノ學術ハ竜動地学協會ノ如ク之ヲ区分ス<sup>(18)</sup>」として示し

ているところは、ヨーロッパ十九世紀中ごろの羅列的地理学の内容を並べたものであって、とくに目あたらしいことはない。

(17) 東京地学協会が会則の主旨に従って、探訪心得書ともいべきものとして、『英国海軍士官視察指掌』という書を購入し(明治十三年)、社員で手分けして訳述し、地理学・統計学・人種学(桂太郎)、水路学・天門天学・潮流(柳猶悦)、地震学・地中磁石力(荒井郁之助)、動物学・植物学(品川弥二郎)と原稿を集大成し(明治十四年)、これが後に本会蔵版、水路部編、『学海探究之指針』として出版された(明治二十一年)。その他、安南誌や露國亞細亞疆域志、マルシャル群島見聞志などを企画しあるいは原稿を買入れたりしたが、いずれも発行にいたらなかった。出版したのは阿部敬介、北水洋州及アラスカ沿海見聞録(明治二十九年)小川琢治、台湾諸島誌(明治二十九年)などである。しかし探訪調査のために出張する研究者に囑託し補助したのは少なくなかった(後述)。

(18)〔本科〕地球ノ積及ヒ形 地球ノ運動及ヒ眞實 天体ヨリ受クル感動

〔形質科〕大地天然ノ区分並ニ地質 山原沙漠鈹山鈹石 動植物ノ説解 海湖川泉 潮汐流其他水理学

上ノ事項 氣候風雨天氣季候 火山地震其他ノ現象

〔特科〕地球ノ古今歴史 人種國語ノ播衍 州郡府邑ノ名称創起変革 天文及ヒ地理上ノ経緯度 針

差針傾其他磁石力ノ現象 高低距離ノ測定 各国及各民種ノ占居スル地ノ大小比例

〔政略科〕人口人民ノ種別及ヒ統計 地面ノ人工区分耕作産物 通商製作漁獵 政体風俗法律政略 溝

渠道路橋梁水車市場 宗教教育兵力美術

### 典型的な例会演説

以上にみたような協会の設立趣旨の演説や会則は、創立までの同志勧誘の見解を述べたものすぎないともいえよう。現実の協会の意図したところは毎月の例会演説に示されている。

創立第一回の例会は陸軍中尉島弘毅の満洲紀行の演説であった。それは明治十年、北京を発して山海関を越え盛京

省奉天府にいたり、吉林烏喇(吉林)、伯都訥(扶余)をすぎ黒竜江省齊々哈爾まで行き、そこから東南に還って呼蘭河・北林子の新墾地を過ぎ(まだ哈爾濱はない)三姓(依蘭)に出ようとして馬賊にさえぎられ、南行して再び吉林に出、そこより東行、鏡泊湖畔を経て寧古塔(寧安)に行き、烏拉地阿斯徳に行こうとしてまた馬賊にあい、やむなく吉林にもどりそれより蒙地(当時)に入り長春庁(寛城子)、昌図庁、法庫門を経て、奉天府に帰り東行、清の大祖発祥の地、興京(通化)にいたり、西方に向い遼陽、牛莊(營口)をまわって山海関に入った。全行程七か月、まことに大旅行であった。

演説はその行程の見聞をまとめたもので、山海関、奉天府、吉林城、齊々哈爾、寧古塔、興京等の景況を述べ、地勢・風俗・物産・交通、あるいは歴史・治安・文字を述べる等、特別な方式はなく見聞した一切について語ったものである。第一年会において渡辺幹事は「邦人ノ東三省ニ遊フ、古来未タ其人アラス、国史ニヨレハ元正天皇養老四年春正月、渡島津輕津ノ司從七位上諸君鞍男等六人ヲ靺鞨国ニ遣シ其風土ヲ觀察セラル、事アリ、古ノ靺鞨ハ後世渤海ノ地ニシテ即今清国東三省盛京吉林黒竜江ノ地ナレハ島氏ノ此行ハ、寛政中松前ノ漂流人其地ヲ經過スルヲ除キ、千載僅々唯二回ノ旅行タリ」と述べているのは、ちと大げさのようでもあるが、要は東京地学協会がこのような日本人による未知の地の見聞記録を高く評価したことである。

これはロンドンの Royal Geographical Society の精神であり、また地球上の地理的空白地帯の探検が、十九世紀前半からの地理学の一つの先端的業績であったのである。おそらく渡辺洪基がヨーロッパの「地学協会」に見、日本にも同様のものが必要と感じて導入しようとしたものは、これであったのであろう。従来日本にあった中国伝統の

文献をもとにする地誌記載でもなく、外国諸国誌の学校教育的素材、民衆啓蒙的国尽し往来ものでもない、自らの耳目で国人未知の地を跋涉し探検すること、これが「地学」であり東京地学協会の使命であると考えたのである。

そのことは各年会における渡辺洪基の年間報告につけ加えた各演説の寸言にも現われている。(圏点、石田)

「……逐一指摘シテ洩スコナシ、今日ニ切要ナル觀察ト謂フヘシ」

「……ノ形勢、氣候、風俗、言語、動植物ニ及ヒ大小残ス所ナシ、皆之、實、歴、親、見、ニ得ラレタリ、古來臆測ノ異見ニ出ル者ト同日ノ論ニ非ズ」

「……其山川、形勢、戸口、物産ヨリ貿易ノ盛衰、風俗ノ強弱ニ至ル逐一探訪遺ス所ナシ」

「……風土形勢ヨリ其宗教風俗ノ異同、輸出入物、教育工作、陸海ノ軍備ニ及ヒ逐一論述……」

「……皆之ヲ目撃ニ得ラレ、詳ニ其得失ヲ指點……」

「……國人此地ニ至ル者ノ嚆矢タリ」

こういう幹事の評価は第四巻以降についてもみられる。

「……各地方経歴見聞ノ実況細大トナク委曲ニ演出シ、人ヲシテ身其地ヲ躡ムノ想ヲ作サシム」

「……此期間多クハ會員諸氏ノ実践親視スル所ノモノニシテ……ノ如キハ最モ新見異聞トイフヘシ、此ノ如ク地理ヲ構成スル者、陸統此館ニ会同スルハ、本会ノ為諸君ト共ニ賀セサルヘカラス」(第五年会、明一七・五・三一)

「其説タル事々物々世ニ益シ人ヲ驚カスノ異聞新報ナラサルナク、殊ニ紀行ノ如キハ演説諸氏実践目撃ノコトニ係レハ山川ノ險阨、道路ノ難易、風俗ノ淳漓、政体ノ異同ヲ説ク歴々面クカ如ク之ヲ聞クモノヲシテ坐シテ千里ノ外ヲ知り、目其地ヲ見、足其境ヲ踐ムノ想ヲ懷カシム、是等ノ項ハ歴史地誌ノ言ハサル所ヲ述ヘ、足ラサル所ヲ補ヒ文化ノ進歩、宇内ノ大勢ヲ觀察ス

ルニ於テ有用欠クヘカラサルモノナリ」(第八年会、明二〇・五・一一)

「其説述スル所、主トシテ探征実查ノ効果タルヲ以テ設、若想像舞文ノ快ナシト雖モ真摯ナル趣味ト健全ナル利益ハ、余輩之ヲ其中ヨリ収ムルヲ得ベキハ疑ハサルナリ」(第十一年会、明二三・五・二七)

すなわち実見を重んずるといふのは、東京地学協会の性格として渡辺洪基の推してやまぬところであり、ヨーロッパの「地学協会」において見たものであったといえよう。<sup>(19)</sup>

(19) かゝる学風は日本にももちろんあった。柳田国男が江戸時代の地理書として高く評価する古川古松軒の東遊雜記や真澄遊覽記の、自己の見たものを自己の感覚で記述する、あるいは見ざれば信ぜずという精神は、西洋の十八世紀以来の科学にも通ずるものであり、博物学・地理学がこのようなフィールド・スタディスによって生れてきたのである。

たゞどこまでいっても、情報の収集提供であり、実見の記録の累積に終るか、フンボルトのように実見、情報資料が、それを、もとにして一つの理論ないし体系に組み立てられるか、あるいは既存の諸哲学や経済学・政治学の理論を援用しあてはめるか、それは『協会報告』の次の『地学雜誌』の時代(明治後半から大正震災まで)と、それにつゞく『地球』『地理学評論』という地理学専門の雑誌の誕生の時代について論ずることにしよう。

初期の紀行見聞談 『東京地学協会報告』十八巻のうち、第一―三巻は内容からみて第一期といえるが、この三年のうちから右のような紀行見聞談に属するものを拾い出すと

例會演説日

明二

(四・二六) 島 弘 毅 (陸軍中尉)

(五・三一) 古川 宣 啓 (陸軍大尉)

(一一・二九) 近藤 真 鋤 (外務省領事官)

『東京地学協会報告』

『協会報告』表題、巻・号

満州紀行抜書(一の一)

遼東日誌摘要(一の二)

朝鮮鎮江記(一の六)

- ( ) " ( ) 海津三雄 ( ) " ( ) 朝鮮国漢城の地形概略 (一の六)
- (二・二〇〇) 海津三雄 ( ) " ( ) 漢城風俗 (一の七)
- 明<sup>二三</sup> (一・三二一) 伊地知貞馨 (? ) 琉球沿革地理、一 (一の二一〇)
- ( ) " ( ) 榎本武揚 (もと駐露公使) 西比里亜紀行 (原稿なし)
- (二・二八) 海津三雄 (領事官) 元山津の記 (一の九)
- ( ) " ( ) 宮崎駿児 ( ) " ( ) 清国厦門港記事 (一の九)
- (三・二七) 渡辺洪基 (もと公使館書記官) 東婦録 (ロンドン—オデッサ) (一の二〇)
- (四・二四) 伊知地貞馨 (? ) 琉球沿革地理、二 (二の二)
- (五・二九) 黒岡帯刀 (陸軍大尉) 烏拉潮斯德紀行 (二の二)
- (九・二五) 益藤邦介 (? ) 揚子江紀行摘要 (二の四)
- ( ) " ( ) 川本清一 (? ) 波斯地理并沿革、一 (二の四)
- (一〇・三〇) 浅見忠雄 (? ) 豪太利亜紀行 (二の五)
- (一一・二七) 本宿宅命 (海軍大尉) 孟壳紀行 (二の六)
- 明<sup>二四</sup> (一二・二五) " ( ) " ( ) 波斯海航海記事 (二の七)
- (一・二九) 浅見忠雄 (? ) 豪洲紀行、二 (二の八)
- (二・二六) 福島安正 (陸軍) 多倫諾爾紀行 (二の九)
- (三・二六) 中田敬義 (外務省) 北京南下紀行 (二の二〇)
- (五・二八) 西徳二郎 (外務省) 中央アジア紀行 (原稿なし)



- (六・二五) 島 弘 毅 (陸軍) 上海・北京紀行 (三の三)
- (九・二四) 吉田正春 (外務省理事官) 番富達都及番須羅紀行 (三の四)
- ( ) 島 弘 毅 (陸軍) 清国運河紀行 (三の四)
- ( ) 福島安正 (陸軍) 多倫諾爾紀行 (三の四)

このほかこの種の異境の見聞紀行に属するものとして、例会で演説せず『協会報告』に「地学雑報」「地学通信」として載せられたものがある。浦潮港領事來報 (外事觀察雜誌) などの官庁報告より転載したもの、清国在留の外務省関係者の投稿 (紀行、翻譯など)、第二巻後半以降になるとアジア各地 (清国、ロシア関係が比較的多い) のロンドン地理学協会誌の翻譯記事が多くなる (原稿不足によるものか、地学協会の主旨の上から必要と認めたものか、多くは協会の書記が訳している)。そういう「地学雑報」のなかでオリジナルのものもある。

久世原 (?) 薩哈連島近海巡廻記 (二の九・一〇、三の一・三)

長谷部辰連 (開拓中判官)、時任為基 (開拓使出仕)、千島巡航概記 (三の八・九・一〇、四の三)

これら紀行見聞談のなかで多少、類を異にし、当時の地学Ⅱ地理学の行き方の一つの萌芽をなすものは、

古川直誉 (陸軍大尉) 波斯事情 (三の五・七・八・九・一〇、四の一・二・三)

佐々木猛綱 (?) 本邦及新西蘭土之關係 (二の八)

前者は明一四・一〇・二九から明一五・六・三〇まで八回にわたり、旅行してきたベルシア<sup>(20)</sup>について演説しているが『協会報告』にのせられているところは他の見聞紀行談と異なり、政体・法律・教育・略史・歳入・租税・電信郵

便・度量衡・貨幣・曆法・道路運輸・氣候・風土病・陸軍・造兵局・軍律・人口という風な項目に分けて、自己の見聞も多少はあるが主として一国の事情を各方面から説明するという方法で、関係文献をしらべ関係当局者から聞きだしたことを整理したものである。第三年会（明一五・五・一五）において幹事北沢正誠は（第三所巻載の）第五回の演説記事について

「……道路運輸ノ方法、……ノ景況及ビ路程ヲ説ク最モ詳明ナリ、入ラシテ身、其境ニ入ルガ如キヲ感セシムルノミナラズ、学者扱ソテ以テ波斯ヲ旅行スルノ実用トスヘシ……実ニ丁寧深切至ラサル所ナク……本邦未ダ波斯ノ事情ヲ詳説スルノ書ナク、学者多クハ臆懼ノ間ニ其国ヲ知ルモノ僅ニ数年以前ニ於テ然ナリキ……此數回ノ報道ノ如キ其事ヲ衆ニ知ラシメ、将来ノ規模ヲ立ルニ於テ補益大ナリト云ウヘシ、即チ我国ノ地学ニ於テ其功少ナカラサル者トス」

と述べている。これは一面、北沢正誠の地理観でもあるが、この紀行見聞派の一つの行き方はすなわち自己の見聞を主とするよりは、その国の実情をくまなく深切丁寧に記述するのである。これも科学の一つの方法とくに地理学の一方法であることには間違いはないが、単なる聞き書、転写翻譯に終る危険が生ずる。自己の見聞感覚をもととして発見、発明するというおそらく渡辺洪基のねらったものとは程遠くなる惧がある。<sup>(21)</sup>

後者は明一四・一・二九の例会演説で、ニュージーランドでの見聞や事情を詳さに語るよりは「該島ハ近ク我国ニ接シ航路僅ニ十余日、政治上ヨリ之ヲ論スルモ、又商務上ヨリ之ヲ究ムルモ、宜ク我が取ルヘキ地ナリ、嗚呼、今日ハ我が該島ヲ略スヘキ機会ナリ」という一種の政治論である。じっさいの演説の内容はわからぬが、僅か二ページの記事では、政論以上のもではない。<sup>(22)</sup>

(20) この古川大尉の行は外務省理事官吉田正春(一八五一—一九二一)とともに明治十三年、ベルシャと通商交渉に行ったときのものであり、吉田正春は「回疆探検波斯之旅」を著わした。当時、日本人未見の国についてのこととて世評に高かったものであるから、東京地学協会うってつけの話題であり演者であったといえよう。

(21) ある項目について整理された記述は、ともすれば教科書風、あるいは学校地理風になる。これは「皇国地誌」あるいは中国の方志の伝統ともつながって、自己の見聞体験感覚を無視する傾向をも生じ、一見、統計的正確ささえ示せば事たれりという風になる。明治前半にあっては外国事情のこのような記述も、地学としては意味があったかもしれない。

現在の地理学界の学会報告のなかには、内容としてはその土地の人ならば常識になっていることを、統計的に整理して述べたに止まるのではないかと思われるものがあるのと一脈相通じている。

(22) 明治十年代から日本にポリネシア探検熱が相当あったようである。「東京地学協会報告」にも鈴木経勲、志賀重昂など、後には田代安定、田口卯吉などの名が見える。みな経世政治の言説になりやすい傾向をもっていた。

### 古典的な文献調査派の残存

東京地学協会が右にのべたような実踏実見の報告を高く評価しているにかかわらず、『協会報告』を全部そのような紀行で埋めるわけにはいかなかった。回が進み号を追うにしたがって、明らかに演説を依頼すべき人の選択難、原稿不足が目立ってくる。そうでなくとも、当時の日本で地理として考えられていたものを、全然排除するわけにも行かなかったのであろうから、会則立案の段階で旧来の地理家が入っていたのも領けないことではない。これが『協会報告』のもう一つのタイプを示す。

最初に上野精養軒で本会設立を議した十六名はほとんど華族・外交官・軍人にして、このカテゴリーに入らぬのは正七位北沢正誠一人であった。彼はおそらく当時、内務省地理局の関係者であったはずであり、それが鍋島直大・長岡護美・渡辺洪基・桂太郎という西洋帰りとともに規則立案委員になり、協会が創立されるや十二議員の一人にあげ

られ、さらに渡辺洪基・桂太郎・長岡護美とともに四幹事の一人となつて、協会運営の責任者の一人となつたのである。

したがって渡辺洪基の西洋流、実見紀行派に対して、中国風の文献による沿革調査的地理を展開したのは北沢正誠であつたにちがひなく、『協会報告』が原稿難に陥るや地理局の同僚を動員したことは想像に難くない。またそれのみならず、前者の実見紀行派のなにも、地理の話としてまとめようとする、中国風の沿革記述の地理を採用するものもあつた。

(23) 北沢正誠 地理寮七等出仕より明八・九修史館三等修撰となり明一〇・一廐官。東京地学協会創立当時はおそらく内務省地理局にいたものと思われるが、官等は高くなかつたので創立時の名簿には身分が記入してなく、たゞ正七位とのみあるのであろう。後年、外務省の属官であつたこともあり、東京市の区長となり、また東京府小笠原島へ赴任しており(島司?)、協会で小笠原談をしている。

このタイプの典型をあげると、創立後第二回の例会の北沢正誠の元代疆域考である。成吉思汗の行軍用兵の跡を詳にせんと、元史類編蒙古源流、歴代漢北西域紀行等でわからぬところを、清の魏源の元代疆域考、元代西征考を読むに及んでやゝその緒を得たが、十九世紀のフランス・ドイツ・ロシアのアジア沿革図や書籍などを参照して「魏源ノ夢想モ及ハサル」ことは「魏源ノ識シナイデルニ及ハサルニ非ラス、坐談スル者ハ跋涉スル者ニ及」ばさることを知つて、元史の誤を正して、一図をつくつて挿入した。そして次回以降、三回にわたつて元の開国史を演説している。

地図の上で昔の歴史的事実や場所を明らかにしようというのはまだしも、開国史を細々と述べるあたり、中国風の地理が歴史の従属物であつた時代の思想である。当時すでにヨーロッパではフンボルトやリッターの没後二十年で、

ストラボンの地理学Ⅱ地誌とは別のものが誕生しており、新しい大学のなかに科学としての地理学が芽生えていたのであるが、地理学自体がまだ独立した学問的内容をそなえない日本であればいたし方ない。

また第五回の例会の青江秀の九州火山論のごとき、「鹿児島戦争」のとき二年間、薩摩において薩隅煙草録、鹿児島火山誌、西海道篇などの著をなしたというが、火山を論ずるにあたってまず日本の古今の古書九十八部を引用書目としてあげ、もっぱらこれによってその火山活動を説明し、新たに見聞を加える。しかし青江秀は自らいうごとく「モトヨリ地質学者ニアラス、理化学者ニアラス、農学者ニモアラサレハ……火山変動ノ蘊奥ヲ審究シ洋カニ火脉貫徹ノ淵源ヲ明解……シ能ハサルモノ」であり、地質学の状況では後五——一〇年もしないと科学的な論説が出ないのであるからいたし方がない。ただ、今までこういうことは古文獻の涉獵が主な研究方法だったので、それを踏襲したので中国流の旧派、皇国地誌を推進しつつあった地理局地誌課であったのである。

地理局地誌課長塚本明毅や課員河田巖の所説はそれでも一応スジの通ったものであったが、同じ課員河井庫太郎(24)になるとかなりピントがはずれているといえようか。河井庫太郎は明治十四年九月「地学に篤志にして地理書の著述もあれば、入社金を免じて」入社を承認されている。これは東京地学協会の貴族的性格からいって、まことに破格なことである。そして同氏編の「地学辞書は本邦地理学書の嚆矢につき購求」して協会の文庫に備えつけられた。

(24) 河井庫太郎については日本科学技術史大系、一四、地球宇宙科学、一六四頁以下に記事がある。東京地学協会では入会以来、しばしば例会で演説し一四の論説がのっている。同一人としてはもっとも多い方である。大部分は文献による沿革・遺跡しらべであり、なかには「白蛇記」などという駒込の私邸に白蛇を捕えたことから、古往今来の史乘に徴し編年体に白色の禽

獸を陳述したものであり、明治二十年代になると同じ方法ながら統計的にこれを処理するようになる(後述)。なお河井は明二四・四・一四に協会を除名されているが、これは同人の詐偽事件(前記、地球宇宙科学篇記載)のためであろう。個人的にはともあれ、河井の「日本地学辞書」(明治一四年刊、七二八頁)と「大日本府県志」(全一・二八巻のうち一四巻まで刊行)は日本の明治初期の地理書として、旧来の中国風の一つの決算——国家機構による「皇国地誌」に対して民間における——ともいべきものであった。

そこで『協会報告』第一—三巻からこの派に属するものをあげてみよう。

- |                                |            |                          |
|--------------------------------|------------|--------------------------|
| 明 <sup>二一</sup><br>(五・三一)      | 北沢正誠(地理局?) | 元代疆域考(一の二)               |
| (六・二八、一二・二〇、一・三二)              | 〃          | 元代關国略(一の三・七・八)           |
| 明 <sup>二三</sup><br>(一〇・二五)     | 青江秀(?)     | 九州火山論(一の五)               |
| (五・二九)                         | 青江秀(〃)     | 中古外交志(山田長政)(二の二)         |
| (六・二六)                         | 河田熊(地誌課)   | 論日本地誌源委(二の三)             |
| (一〇・三一)                        | 川本清一(?)    | 波斯地理並沿革、二(歴史)(二の五)       |
| 明 <sup>二四</sup><br>(二・二五、三・二六) | 塚本明毅(地誌課)  | 日本国郡沿革考(二の七・一〇、三の二)      |
| (二・二六)                         | 北沢正誠(地理局?) | 蝦夷経略考(二の九)               |
| (五・二八、六・二五)                    | 鄭永寧(?)     | 竜沙紀略(三の二・三)、一四七年前の旅行記の訳述 |
| (一一・二六)                        | 中田敬義(外務省)  | 支那本部州郡沿革略志(三の六)          |
| ( )                            | 河井庫太郎(地誌課) | 小石川区大塚考、江戸考(三の六)         |
| (一二・一四)                        | 中田敬義(外務省)  | 支那山東金剛石考(翻譯)(三の七)        |

明<sup>一五</sup>  
(一・二七)

花房義質(朝鮮公使)

支那政府滿州沿海地を露國に讓与せし遺聞(三の八)

(一・二四、三・三一)

榎本武揚(海軍卿)

千島疆界考、付、露寇遺聞(三の九・一〇)

文獻沿革派と実見紀行派の中間に属すると思われるものもいくつかあったが、次のごときは自己の見聞もあり、自己の意見もあるものである。

明<sup>二</sup>  
(六・二八)

大原里賢(?)

清国文武官出身緣由(一の三)

明<sup>四</sup>  
(一・二九)

白野夏雲(?)

古代地名考、付、蝦夷語は純粹なる國語の説(二の八)

(三・二六)

皇國名珠寶石の産せざるは深き原因あるの説(二の一〇)

(一〇・二九)

中田敬義(外務省)

清国兵制一斑(三の五)

例会における演説でなく寄稿の地学雜報にも、<sup>キヤッタ</sup>ハック図・北京間の駅通法一斑(神戸応一)とか製塩・酢造その他の工業製造法の方法組織をのべた清国通信(大原里賢)とかがある。

### 異質的な經濟地理の論文

『協會報告』第一—三卷のみでなく、約十年を通して異質的な論文が一つある。実見紀

行派でもなく沿革文獻派でもなく、近代的な統計を基礎として見解を發展させるもので、第二期以降にあらわれる科学的調査論文の先驅をなすものである。

(明一五・三・三一)

佐野常樹<sup>(25)</sup>

地下富源の概況(三の一〇)

これは日本最大の炭坑長崎の坑主・鉾区面積・石炭産額(明治十二年で日本の六割)・販売価格・運賃等をしらべたもので、結論として外国船舶による運賃の高いことをあげ、石炭生産総価格と石炭輸送費の比率は一トン三・四二弗

であり、その利は全部外人の占める所となる。明治九—一二年で官行炭山の出炭高は二倍余、私行炭山はさらに多かるべく、明治六—一三年で石炭輸出高は三倍になっている。しかるに輸送船舶が少なく、明治十四年一月にいたる七か月の平均炭価をみるに、長崎では一トン三・一五弗にすぎないのに、横浜において唐津炭で六・〇五弗である。

造船回漕のことは夙に政府の保護によるが、最大の障碍は「某一会社ニ助成金ヲ付与シ船舶ヲ貸給シ若シクハ之ヲ廉売スル」であつて「之ヲ受クルモノ漸ク専横ニ涉リ之ヲ受ケサルモノ自ら逡巡進マズ、竟ニ偏枯ノ弊ヲ生シタルハ世人ノ既ニ目撃スル所ナリ、之カ弊ヲ払ハスンハ此業ノ郵隆蓋シ期スヘカラス」と述べている。あとに福岡県下豊前筑前地方の炭田の将来性を述べ、小坑主が多く「一郡同心シテ以テ石炭取扱所ナルモノ」を設置した赤池村の例をあげている。

当時の地質鉱床の調査からみて、もちろん詳しいこともわからぬが、入手し得る限りの資料統計（モンローやライマンの報文の統計や輸送・炭価などの経済統計）を使って説明しているところ、このまゝ大正末期の経済地理の論文としても通用するかもしれない。次の時代の地質学的調査報告と異なり、工鉱学の社会的側面にも関心をもつて説いているところを、地学協会としてはとくに高く評価すべきであつたが、そのことなくしてその後、石炭のみならず地質関係のことは純自然科学の問題、地層や化石の問題として扱われるようになり、また統計資料の扱い方も単なる列挙主義になり、本稿のごとくそれを基として所論を進めるといふものが、ついに見られなかつたのは遺憾なことであつた。

(25) 本稿の筆者については未詳であるが、「予ハ固ヨリ此材質ニ関スル所ノ学、即チ礦物学若クハ地質学等ヲ講究セルモノニ



アラス、又我礦山坑区ヲ跋涉シテ親ク其狀況ヲ歴閲セルモノニアラス、惟客歲、上野ニ於テ開設セラレタル博覧会ニ就テ坑産ヲ目撃スルニ追シテ聊カ感覺スル所アレリ」と述べている。同じ筆者が第四卷以降にいくつか資源、鉱業鉱山のことを書いているが、これほど鮮明な内容ではない。

#### 四 安定と停滞期の『協会報告』

『東京地学協会報告』全十八巻を創立後の三年間は草創期とすれば、次の明治十五年度から二十二年度までの七年間を第二期とすることができよう。この期間、東京地学協会は堂々たる団体として安定した歩みを続けた。<sup>(26)</sup>しかし協会の活動の成果の一つである『協会報告』からみると、明らかに停滞の陰影が見える。例会の報告演説も情性で動いているような感じがする。創立当時の新鮮さが何とはなしに薄れ、副会長や幹事も他事に忙殺されるようになったためか、往年の意気が見えず、徒らに貴族風のみが目につき、資格をやかましくいうためか新会員の増加も少ない。

(26) この期間の協会の歩みを拙稿、編年史から抜き書きしてみよう。

明一五・六 前年ベニスで開かれた第三回万国地学公会（今の国際地理学会議）に出陳した協会の規則書・報告に対し、第五級褒賞状が到着した。——協会は国際的に地歩をしめ各国地理学協会と出版物の交換を多くしている。また北白川社長官は外国の地理学協会より名誉会員に推薦をうけている。当時の日本の学協会としては異数のことである。

明一五・一二 京橋区西紺屋町に土地建物を買い入れた。

明一六・三 本会の建議により故伊能忠敬に贈位あり、記念碑を建てようと英仏両語の趣意書を『協会報告』にのせる。

明一八・五 協会の資金（寄付金）が二万円に達し募金完了。

明一九・四 協会の「規模大いに定まり維持の目的も立っ」たので入会金（十円）を廃止する。

明二一・五 十年紀祝祭を帝國大学小石川植物園に催す。会員五〇余、招待者一〇〇余名。その景況の盛んなことは各新聞に報ぜられた。

明二二・一二 長く計画進行中の芝公園の伊能忠敬測地遺功表の建碑竣功。会館を修築する。「地坪一面に講堂を築き当時は公会堂として世間に著名なりし」(小藤文次郎、地学雜誌の由来、地学雜誌、昭五、五〇〇号による)ものである。

明二三・一 新年度より年費金(一二円)を半額とすることをきめる。

(27) 第五年会(明一七・五・三一)における北白川会長宮の演説に「本会創立以来、有志ノ資金ヲ補助スルアリ、其額二万円余ニ及ヒ……来期内ニハ既ニ其負債ヲ弁償シ其資本ヲ結合シテ、五年前諸君ト相結ンデ起創シタル事業ノ一大段落ヲ為スニ至レル者ハ誠ニ本会ガ幸途スル進歩ヲ為シタルモノト云フベシ、其五ヶ年間、例会五十余回、演説ニ討論ニ地学ニ事項決シテ之シキヲ告クル事ナク、海外ノ学会社ノ本会ト通信ヲ開ク者四十一、内地ニアル者モ亦官府ト私会トヲ合セテ二十五アリ……唯遺憾ナルハ平日文庫ニ來觀スル者固ヨリ論ナク、僅二月一回ノ例会ニ於ケルモ此堂ニ相見ル者甚ダ少ナク、其所謂有志中ノ最タル役員中ニ於ケルモ幹事数名ノ外、副会長議員ニ至ルマデ相会スル者極メテ少ナシ」とある。会長演説で副会長以下の出席少きを叱咤せしめている幹事渡辺洪基の焦慮が見えるようである。

第六年会(明一八・五・七)の会長演説にも「唯憾ム近年諸學術協会ノ多キ為メ余ヲ始メ職員諸君亦多途ニ奔走シ、唯日モ給セサルノ勢アリ、自ラ本会ノ一亦等閑ニ付セサルヲ免レス」

この期は『協会報告』では第四—一〇巻にあたるが、内容を分類してみると、前期同様、(一)文献沿革派、(二)紀行見聞派はあるが、新たに紀行見聞より一步進んで会員の調査研究に属するものの加わったことが特徴といえる。単なる紀行でなく調査ということになると、対象の地域は外国ではなく日本であることが多く、世界未知のところを知ろうという協会創立のころと、内容的性格に多少の差が見えはじめる。その一端はこの期の最後を示す第十年会(明二二・五・二八)における北白川会長宮の演述にあらわれている。

「邦人ヲシテ益々地学ノ必須ヲ感ゼシメタルカ如シ、実業者會テ以為ク、地学ノ須要独リ軍事ニ於テ之ヲ見ルノミト、而シテ今ヤ彼輩貿易ニ實際ニ地学ノ思想極メテ其緊要ナルヲ覺リ、着々之ヲ實際ニ利用セントス、學生會テ以為ク、地学ハ初歩ヲ得ハ可ナリ、何ゾ専門タルニアラント、而シテ今ヤ彼輩之ヲ実験理学トシテ研究スヘキモノトシ、漸次事ニ斯ニ從ハントス、蓋文運必然ノ勢ニ依ルト雖モ而シ本会ノ功、与テ力多キヲ疑ハサルナリ」

すなわち地学の世間における評価の変化、あるいは協会自体の地学に対する評価をかえたことを指摘している。軍事的方面よりは商業経済的方面を、また学校教育的方面よりは自然科学的側面を重視することを示している。それは日本の商工業の発展、国際市場への進出、工業化への離陸準備にも関係するものと思われる。しかし東京地学協会は直接、政界や経済界に向けて発言は一つもしていない。協会の事業としては例会の演説とそれを掲載した『協会報告』を配布することが主で、とくに陳情・建策などはしていない。官辺に有力な会員も名をつらねているが、実質的な協会の「成果」や「演説」の趣旨が社会なり、要路に向って展開されたということもなかったのではなからうか\*。

\* 当時の東京地学協会の一般社会あるいは政界・官界に対する影響力がどのようなものであったか、もちろん、わたくしの如き単に書かれたもので推測している者にはわからない。『地学雑誌』の五〇〇号記念号（昭五・一〇）に当時の事情を直接知っている会員の記述もあるが、祝賀的美化で飾られたものが多い。（『東洋学芸雑誌』その他経済政治に関する当時の公私の諸雑誌を調べれば、あるいは協会の活動が那辺にまで及んでいたか、わかるかもしれない。）

「前記本会員等の（創立後）過去十年間の欧米・亜細亞諸国の視察巡遊報告が、国の制度改革や条約改正等に有力なる資料を提供したことは、けだし甚大なもので、また実業農民の指針となったことも、顕著であったことは疑う余地が無い。」（大井上義近、東京地学協会の沿革、地学雑誌 六三卷、昭二九、創立七十五周年特別記念号）。大井上義近は、大正一〇年から昭和一二年まで協会の事業・運営に接触していたのであるが、明治三十年代以前については、聞いて知っている程度であろう。

したがって、こゝにいう官界・実業界に影響が「顕著であったことは疑う余地がない」というのも、特別な事実に基いた記述とは思えない。しかし渡辺洪基はじめ榎本武揚・花房義質・長岡護美・大鳥圭介ら、官界・政界に活躍し、かつ協会の事業・運営に多少熱意のあった会員がいたことも事実で、それらの人々が協会の例会・刊行物などで得た知識・材料を、何らかの形で利用したこともあったであろう。

### 凋落する文献沿革派

まず前代からの続きをなすものとみると、第一類の中国風方志の流派では、その凋落の著しいことに気付く。その本流ともいふべき地理局地誌課が「皇国地誌」に多忙を極めたためかもしれないが、歴史的事実の説明をしたもの（多数の古書文献からの単なる摘録を旨としないもの）がふえてくる。これはむしろ本来、史学の部に入るべきものだが、地理が歴史の随伴物であった江戸時代中国風の名残だから、便宜上、この類に含めて示すと、次のようなものがあげられる。

明一五

(九・二九)

河井庫太郎 (地誌課)

上総国白山神社弘文帝山陵別考 (四の四)

(九・二九)

佐野常民 (大藏卿)

故伊能忠敬翁事蹟 (四の四)<sup>(28)</sup>

(一〇・二七、一一・二四)

鈴木真年 (?)

日本開闢以来地理沿革考 (原稿なし)

明一六

(三・三一)

北沢正誠 (地理局?)

高岳親王求仏法至羅越国薨於流沙河上考 (四の一〇)<sup>(29)</sup>

明一七

(九・二九)

河井庫太郎 (地誌課)

白蛇記 (五の三)

(四・二六)

河井庫太郎 (〃)

長久保赤水先生伝 (六の一)

(四・二六)

大鳥圭介 (工部大学校長?)

支那人種論 (六の一・四)

(六・二八、一一・二九、一・三一) 大鳥圭介 (〃)

支那東北諸国沿革考 (六の三・四・六・八)

(一〇・二五)

大原里賢(外務省)

清國塩政略(六の五)

(一二・二〇、一・三二)

神戸応一(外務省)

清露外交沿革備考(六の五・八)

明<sup>一八</sup>

(三・二八)

赤松則良(海軍)

呂宋嶋支那殖民始末(七の一)

(六・二七)

神戸応一(外務省)

露國歴代南侵策話(七の三・四)(訳補)

(一一・二八、一二・一九)

大島圭介

武蔵国并東京古今沿革図識(七の六)

明<sup>一九</sup>

(一・三〇)

河井庫太郎(地誌課)

倭武尊東征路程考(七の七・八)

明<sup>二〇</sup>

(五・二五)

坪井信良(?)

日本地名種類論(八の二)

(一・二五)

西暦一六四三年荷蘭船南部漂着始末(八の七・八、九の三)(一六六九年の和蘭書より訳)

(五・二四)

大島圭介

印度志(地理・歴史)(原稿なし)

明<sup>二一</sup>

(五・二四)

河井庫太郎(地誌課)

茨城県地理雑話(九の二)

(六・二六)

河井庫太郎( )

日本首府沿革論(一〇の五・七)

(28) 佐野常民のこの演説が機縁になって、翌年二月、贈位の恩典を得、碑を建てることになり募金につとめ明治二十二年、芝公園内に竣功させた(後述参照)。(保柳睦美、旧伊能忠敬測地遺功表について、地学雑誌、七四の七四七—一九六五年)。

(29) 北沢正誠は明治十二年四月、協会設立のとき事業として高岳法親王についてラオス・ビルマ探検を提案したが、同じ外地探検であっても歴史的遺跡をめぐるのと、渡辺洪基らが考えた外地事情撰取のための探検とでは、ニュアンスもちがいがい具体的話題に上るには程遠かったのであろう。十四年十二月に西本願寺の北畠道竜に示しロンドン地理学協会と連絡せよといったとあり、北畠は十七年に欧亜周遊記を例会で演説している。

隆盛期に入る紀行派 これに対して東京地学協会の創設の表看板とも考えられる第二類の紀行見聞の演説・記事は相かわらず多い。前期と異るところは地域が朝鮮・中国大陸・シベリア・東南アジアのほか、南方の島々に向けられること、外交官・軍人以外にも旅行者がふえてくることである。その旅行者も人類学者・地質学者のものは、どうしてもその専門の見地だけの見方になりがちであるが、経済・科学・文化の一般事情を見ようとすむいわゆる旅行家のものもあらわれてくる。それは明治十年代後半の空気を反映して、国益増進から版図拡大というような意図をもったものも混りはじめた。

じっさいの例会における演説はどうであったかわからぬが、『協会報告』の記事となると、前期にすでにあらわれたような教科書風、項目別に整理された一国事情というような表現記述も多くなる。次表のうち\*をつけたものがそれである。それはあるいは第三類のうちの「調査」と紙一重といえるかもしれない。

- |     |                               |               |  |
|-----|-------------------------------|---------------|--|
| 明五  | (四・二八)                        | 古川 宣 誉 (陸軍)   | 波斯事情 (統四の一・二・三) *                        |
|     | (一一・五、一・二七)                   | 小 泉 正 保 (?)   | 清国浙江紀行 (四の七・八)                           |
|     | (一一・二六)                       | 山 本 清 堅 (?)   | * <small>キヤフ</small> 恰克図より張家口・上海へ (原稿なし) |
| 明一六 | (四・二八)                        | 梶 山 鼎 介 (陸軍)  | 鴨綠江紀行 (五の一)                              |
|     | (六・三〇)                        | 中 田 敬 義 (外務省) | 朝鮮風土概略 (五の二) *                           |
|     | (一〇・二七)                       | 井 上 敏 夫 (海軍)  | 南北太平洋風潮実験記 (五の四)                         |
|     | (一一・二四、一二・二一、<br>一二・二六、一二・二三) | 神 戸 応 一 (外務省) | 東南俄領実践記 (五の五・六・七・八、六の一・四)                |

明<sup>一七</sup>

(三・二三)

(五・三〇)

(六・二八)

(九・二七)

明<sup>一八</sup>  
(一〇・二五)

(二・二八)

(五・三〇)

(九・二六)

明<sup>一九</sup>  
(四・二七)

( )

(六・二二)

(一〇・二六、一一・三〇、  
一二・二二、二・二八)

明<sup>二〇</sup>  
(二・二五、四・二六)

(六・二八)

( )

(一一・二二、一二・二〇、一・二四)

(一二・二〇)

北島道竜(西本願寺) 欧亜周遊記(原稿なし)

海津三雄(外務省) 朝鮮国北部内地の実況、義州行記(六の二)

〃 (〃) 慶興紀行(六の三)

小泉正保(?) 安南国近況一斑(六の四) \*

赤壁次郎(?) 千嶋巡覽記(原稿なし)

海瀬敏行(外務省?) 韓地事情(原稿なし)

山吉盛義(外務省) 瓊州・北海・澳門三港の実況(原稿なし)

小野田元熙(東京府) 小笠原島近況(七の四) \*

賀田貞一(地質学者) 沖繩宮古八重山紀行(七の五) \*

ドートルメル 暹羅紀行(八の二)

菊地節蔵(陸軍中尉) 滿洲東北部紀行(八の三・四・五・六) \*

島村干雄 嶺南紀行(原稿なし)

福島安正(陸軍) 印度紀行(八の七)

志賀重昂 南洋巡航摘要(八の九)

坪井正五郎(東大) 伊豆諸島風俗談(原稿なし)

賀田貞一(地質学者) 沖繩の人物風景(幻燈写真)

井上陳政(?) 支那漫遊中の経歴(九の七・八) \*

菊池安(理科大学) 伊豆諸島及火山島硫黄島巡航記事(原稿なし)

- |                |                          |                              |
|----------------|--------------------------|------------------------------|
| (一一・二〇〇)       | 菊池節藏(陸軍)                 | 悉比利亚東辺旅行記(九の八・九・一〇・一一、一〇の二)* |
| 明二<br>(一一・二二八) | ドートルメル(?)                | 滿洲紀行(原稿なし)                   |
| ( )            | 田代安定(東大)                 | 海南諸島風俗談(九の一〇)                |
| (三・二七)         | 小島泰次郎(陸軍)                | 露国噸兵州哈萨克形況(九の一二)             |
| (二〇・二三)        | 坪井正五郎(東大)                | アイノ風俗談(原稿なし)                 |
| (一一・二七)        | 原田輝太郎(陸軍)                | アルゼリア紀行(一〇の八)*               |
| ( )            | 若林勝邦(?)                  | 筑波遺跡談(一〇の七)                  |
| (一一・二五)        | 伊集院兼雄(?)                 | 支那人民実業の景況(一〇の八)              |
| 明三<br>(一一・二六)  | 萩野末吉(?)                  | 蒙古旅行(一〇の一〇)                  |
| (三・二六)         | "                        | サイベリア鉄道                      |
| (三・二六)         | 鈴木経敷 <sup>(30)</sup> (?) | マルシャル群島の話(一〇の一、統)*           |

以上は例会の演説を分類したものであるが、「地学雑報」としてのせられたものにもアメリカやロンドンの地理学雑誌の翻譯記事で紀行や外国地誌がある。

シベリア譚所記事(四の四・五・六・七・八) 通計九三頁分

海參威紀聞(四の五・六・八、五の二・四) 通計一九五頁、ウラジオストック駐在領事官神戸応一の港勢情報・統計

アフガニスタン遠征中クौरラム河溪測地の記(四の九) 三七頁

イラワジー河の水源(四の一〇) 四五頁



引田利章編、布哇国略志（四の一〇、五の三）四七頁

曲木如長訳、東京紀行（五の三・四）四三頁

鶴田貫次郎訳、東京国内地旅行記（五の五・六）二三頁

引田利章訳、暹羅紀行（五の七・九、六の二・四）九四頁

引田利章編、濠州ビクトリア州誌（六の六・七・一〇、七の二・三）一〇九頁

白井光太郎、伊豆七島巡航日記（九の四・六・七・八・九）八四頁

坪井信良訳、和蘭使節記事——駿河にて神君に拝謁、明暦三年江戸大火、天皇二条城行幸（九の四・五・六）二七頁

(30) 明治一七年ドイツ領マーシャル群島ラマ島で日本人水夫六人が殺害されたので、外務省より取調べに行った際、鈴木経勲は通訳として同行した（北沢正誠、小笠原島近情、一五の四）。明治二二年四月、協会は鈴木編集にかかる「マルシャル群島見聞志」を買入れ印刷刊行することを議決しているが実現しなかった。鈴木の場合演説は同年三月より四月、六月と続き『協会報告』に七回掲載されている。冒頭に「南洋の群島を調査して、わが版図を拡張し国益を増加せんとす」と述べている。

**調査・研究的な新分野**　この時期の演説・記事で第一―三巻に見えなかったものは、西洋の学問・方法によるものである。報告者はすべて学者・研究者であって、外交官や軍人ではない。しかしこれをもって科学的研究論文が出はじめたと解するのはあたらぬ。多少、学術的なものがあったとしても、当時の日本の施設や資料、また時代的研究水準もあって、啓蒙的あるいは学説紹介的要素が強い。そのほかに何よりも演説する場所が、華族・外交官・高級官吏・軍人などを主とする東京地学協会であって、真個の研究発表は当時すでに存在していたそれぞれの専門学会で報告され掲載されることが見のがせない。あるいはむしろ協会の真骨頂は社会の上層に位する学問研究者ならぬ会員が、近代

科学の成果を吸収すること、あるいは進講を受ける場所であったのかもしれない（ここが明治末、大正時代になると、すっかり変わってきて、東京地学協会の性格が漠然としてくる）。一応、第三類に属するものとしては次表をかかげるが分類所属の困難なものもあり、かなり便宜的である。（――は協会で演説しないもの）

明一五

(四・二八)

磯野 健(水路局観象課長)

東京気候の概略(四の一)

(五・二六)

佐野常樹(?)

地下富源の概況、二(四の二)

(六・三〇)

ナウマン(和田維四郎通訳・翻譯)

日本地形及地質実査(四の三)

(一〇・二七)

荒井郁之助(地理局測量課)

測量術沿革考(四の五)

明一六

(一一・一五)

鈴木真年(?)

日本神道の原因(原稿なし)

(二・一)

磯野 健(水路局)

米國發議の万国通世時は唯本初子午線新定の一点にあるの説(四の九)

( )

二見鏡三郎(地理局測量課)

本邦三角測量の実況(四の九)

(六・三〇)

賀田貞一(地質学者)

米國地質測量紀事(五の二・七・八・九)

明一七

(一・二三)

二見鏡三郎(地理局)

地中海度の説(四の八)

明一八

(三・二八)

伊藤弥次郎(?)

日本鉢山沿革考、山陽道鉢山の概況(六の一〇)

(四・二五)

二見鏡三郎(陸地測量部)

万国子午線會議要略(七の二)

( )

荒井郁之助(東京氣象台)

日本の地学経度(七の一)

( )

田代安定(東大)

沖繩植物考(原稿なし)

二見鏡三郎(陸地測量部)

ドートルメル(?)

田辺太一(?)

大島圭介

神戸応一(外務省)

坪井正五郎(東大)

〃

坪井正五郎(文科大学)

(二〇・二五)

小藤文次郎(理科大学)

荒井郁之助(中央气象台)

原田豊吉(理科大学)

坪井正五郎(文科大学)

関谷清景・菊池安(理科大学)

リース(文科大学)

坪井正五郎(文科大学)

本邦子午線及計時法の説(七の七) 地学雑報

九州地形論(原稿なし)

支那貿易概況(八の九)

日本全国氣候考、付、定時風并黒潮の説(七の二〇)

支那人種成国の闕鑿(八の三)

東京近傍貝塚総論(八の四)

古墳発掘報告(原稿なし)

本邦諸地方にある横穴は穴居の跡にして又人を葬るに用ゐし事も有る説(九の五)

日本の旧世界(一〇の二・三・六)

越後国永明寺日蝕写真(幻燈)(原稿なし)

日本の地質構造(原稿なし)

古墳及び塚穴(一〇の三)

盤梯山破裂実況(一〇の六)

歴史攻究の仕組(一〇の九)

豊前京都郡与原村の古墳(一〇の一〇)

専門の分野としては地質学・氣象学・測地学、それに第八卷以降考古学が圧倒的に多くなる。個々の報告内容の位

置づけは省略するが、日本の西洋科学輸入時代の暁の一ページである\*。考古学の多いのは人類学者坪井正五郎がこれからあと編集に近い仕事をはじめからであり、協会関係者にいわゆる地学の者がいない欠陥があらわれてくる。当時、旧式中国流でない地理学はまだ誕生せず、ナウマン・小藤文次郎・原田豊吉・菊池安などの地質学者が例会演説をしているが、協会の外の人であった。

\* 大井上義近は「明治十六年に行われた賀田貞一氏の米国地質測量に関する講演が、西半球の地学に関する最初のもので、甚だ裨益するところが多かった」としている（前掲誌）。賀田（一八五〇—一九一五）は日本の炭田を調査したライマンの助手で、その帰国後、アメリカに渡りペンシルバニア炭田地方の地質測量に従事、大学派以外で詳さに西洋の方法をその地で身につけた第一人者である。

このほか「地学雑報」としては、何国の最新の人口とか貿易などの統計的紹介が第十卷以降にある。第四卷以降とくに翻譯編集記事が多いのは、あるいはこの種の海外知識を提供することに、地学の意義を認めたのかもしれないが、主として原稿難によるものといえよう。『協会報告』は第四—六卷はそれ以前の一倍半以上の厚さであるが、内容は右にかかげたようなものが多くて、例会における演説の記事は少なく、かつ三月末にした演説が二月号に掲載され、それが五月末の日付で刊行されるという状態であった。<sup>(31)</sup>

内容的にみても右の白井光太郎の報告のごとき、ある号は植物樹種を羅列するだけであったり、渡辺洪基の台湾蕃語一班（六の九）のごとき五九頁にわたって台湾語の対訳であって、地学とどう関係するか了解に苦しむものがあったり、第七卷以降第十三卷にいたるまで栗田万次郎は支那禽獸草木彙攷として（時には漢文で）本草博物学的解説を

『協会報告』(第 3—9 卷)の刊行状況(月・日)

巻	年度	1号 (4月)	2号 (5月)	3号 (6月)	4号 (7月)	5号 (8月)	6号 (9月)	7号 (10月)	8号 (11月)	9号 (12月)	10号 (1月)	11号 (2月)	12号 (3月)	年会 記事 号
3	(明14)	10.21	11.18	11.26	12.8	12.13	12.23	1.31	3.11	4.17	5.13			9.11
4	(明15)	7.31	10.7	11.22	12.27	2.21	5.7	4.12	5.7	5.14	11.13			9.10
5	(明16)	12.10	—	10.22	11.16	12.19	2.23	2.29	3.12	4.9	6.3			6.19
6	(明17)	7.8	8.-	10.24	11.15	12.31	12.30	3.10	3.29	4.27	5.30			6.16
7	(明18)	8.15	12.1	1.20	2.27	3.31	4.27	5.31	6.30	7.30	8.30			なし
8	(明19)	9.30	10.30	11.30	12.20	1.21	2.28	3.31	4.30	5.27				なし
9	(明20)	6.25	9.25	8.30	9.30	10.31	11.30	12.25	1.30	2.28	3.30	4.30	5.30	?

\* 第7年会記事を付載      \*\* 第8年会記事号とする。

つづけ、また釈法顯歴遊天竺記伝(六の七)、北魏僧惠生使西域記(六の九)など漢文で返り点、地名ローマ字つきで長々とのせたりしている。

(31) 『協会報告』がどういふ風に刊行されたかを記録しておく。各号の表紙の右隅に刊行日が印刷されている。(第一、二、一〇、一一の四巻は一巻内の各号の表紙がないので不明である)。大体、月の終の土曜日に例会演説があり、それをその月号として印刷発行するのだから、一—二か月おくれるのは止むを得ない。七、八両月は暑中で例会がないから一年十冊、それに春四—五月の年会記事号一冊というのが、最初の規定であった。

それが第三巻でみると、第一号(四月号にあたる)が半年おくれ十月下旬に出、第二—六号の五冊を十一月中旬から十二月下旬までに続けて出して、あとは第一〇号まで二—三か月おくれでまず順調といえる。しかし次の第五巻の四月号のごときは十二月まで刊行されず、五月号を休んで六月号、九月号が先に出ているという変調であり、第七巻では第一号・二号だけしか年内に出ず、最後の一〇号は翌年の八月末となる始末。一般に年度の前半におくれが甚しく、後半年に何とか取りもどすという状況である。例会の演説講演者の都合もあったろうが、協会の編集の不手際である。

五 『協会報告』の難行期より終末期へ

『東京地学協会報告』の第三期を第一—一四巻(明二—二五年度)、第四期を第一—一八巻(明二六—二九年度)としよう。第三期は『協会報告』が氣息奄々と刊行をづけ、第四期はついに「地学会」<sup>(32)</sup>という団体と合併して、同会編集の『地学雑誌』を月

刊で出すとともに、『協会報告』は季刊として刊行した時期である。

(32) 明治十一年三月に東京大学の地質学教授ナウマンらの主唱によって、理学部諸学科員が博物友会をつくり、やがて動物・植物が分立して、明治十六年地学会となり、研究誌『地学会誌』を年二―三回刊行していた。それが二十二年一月から『地学雑誌』と名を改め月刊で発売するようになり、たちまち当時の學術雑誌の間では自然・人文兩科学にわたり空前の売れ行きを示すことになり、四月には再版を出すような有様であった。

地学会の構成会員は東京大学で地質学、鉱山学を専攻した一群で、卒業生の一部は農商務省地質局・地質調査所に勤務して地質・土性の調査、地質図の調製を行うものであり、他の一部は大学の地質学科の教職員・学生であった。前者は和田維四郎（後年の製鉄所長官）を統領とする地質学の実務者、後者は小藤文次郎、横山又次郎らを先頭とする研究者である。この二者は後年、地学会が東京地学協会に合併されると、ちがった途を歩むことになる。

**難行期の演説内容** 第三期のはじめには東京地学協会は伊能忠敬測地の記念碑を芝公園に建てたり、壮大な会館を

修理落成せしめたりして、世間的な活動は目ざましく、その期の終りごろには当時、世論をわかせた海軍大尉郡司成忠の千島占守島移住を援助したりしている。協会の例会演説とそれを編集した『協会報告』は、この期も第一類、沿革文獻派、第二類、紀行見聞派、第三類、調査研究派と分けることができる。

まず第一類の旧式の中国風地理記載の純粹なものは、内務省地誌課の河井庫太郎にのこるだけで、あと歴史に属するものをこれに含めても、全体として少なくなつたのは、地理学の一つの動向を示すものであろう。

<sup>明三</sup>  
(四・二三) 河井庫太郎(地誌課) 日本火山噴火調(一一の一) 四三頁

(五・二八) 重野安繹(文科大学) 蒙古來襲の話(一一の二) 三頁、未完

(六・二五) 星野恒(?) 京都大仏殿前の塚は鼻塚にして耳塚に非ざる考(一一の三・四)

松岡調(?)

北海道諸駅の廃置及所在の考(一一の四)

河井庫太郎(地誌課)

日本帝国内地区分及名称沿革摘要(一一の五)

明三  
(一・二八)

河井庫太郎(地誌課)

護良親王甲斐国遺跡考(一一の六・一〇〇)

〃〃〃

日本地誌年表(一一の七・八・九)

鈴木券太郎(協会書記)

朝鮮里標考(一二の二)

明二四  
(六・二四)

河井庫太郎(地誌課)

富士山の話(一二の三||四合併号)

明二六  
(五・二六)

永田方正(北海道庁)

阿倍臣蝦夷経略考(一三の一)

明二七  
(一〇・二七)

稲垣満次郎

露国版図拡張地理的一理(一三の四||五合)

明二八

神戸応一(もと領事)

バミル事件の顛末(一四の一〇)

右のうち河井庫太郎の「日本帝国内地区分及名称沿革摘要」は日本の地誌・地図・地方区分名称を古書より明二一・四の市町村制にいたるまでを調べて表示説明したもので、「日本地誌年表」は和銅の昔から明治三十二年までの地誌・旅行記・日記などの書名を地方別・時代別に調査し列挙表示したもので、ともに文献沿革派の方式のなかでも便利なものといえるが、「日本火山噴火調」は日本の文献にあらわれた天変地異人怪を随見随録して桜井勉地理局長に提出したものの一部で、各火山の噴火について、干支、年号、天皇、記事を表示した。月日は陽曆に換算せず、噴火破裂の月次は七月が最多、次に三月、十一月、降灰は三月が最多とし、噴火年次の間隔、兆候(氣候の不順、雹、洪水、地震など)を論じたが、これはすべて文献によっていて、当時の西洋的地質学や地震学の成果には一顧も与えなかったもので、ドイツ留学より帰国した原田豊吉(理科大学教授、地質局長)より攻撃され、旧式地理の弔鐘となったもの

であり、<sup>(33)</sup>重野の蒙古来襲話、その他、稲垣・神戸のものなど純粹に歴史である。

(33) 噴火調に対する反論は前掲、日本科学技術史大系に再録してある。

原田豊吉 東京地学協会報告を読んで感あり 地学雑誌 一の六(明二二)

河井庫太郎 ドクトル原田氏ニ答フ 同 一の一一(明二二)

黙々笑人 註解 同 一の一一(明二二)

第二類の紀行見聞談も多いが、\*のものは整理編集された一國事情であって、紀行的な要素は少なくなり、第三類のなかの調査と区別しがたくなる。

明三

(四・二三、六・二五)

鈴木経勲(?)

マルシャル群島の話(統・一一の一・三・五・六・七・九)\*

明三

(二・三)

高津五郎(?)

非力彬群島紀行(二の八)

明三

(三・二五)

田代安定

太平洋諸島経歴報告、グアム島(二の一一・一二、一二の一・二・七・九)\*

七・九)\*

( )

江南哲夫(外務省?)

朝鮮の近況について(一一の一二)

(六・二四、九・三)

谷田部梅吉(領事)

馬尼刺形勢之一斑(一二の三||四合・五・六・七)

(二〇・二八、一一・二五)

生田得能(真宗僧侶)

暹羅滞在中の見聞(一二の六・七)

(一一・二五)

石井八万次郎(大学生)

九州旅行(一二の八・九)

(二・一六)

岸田吟香

長江図説(原稿なし)

明四

( )

田口卯吉(実業家)

南洋事情大意(一二の八・一〇)\*

(四・二八)

近藤真鋤(外務省)

朝鮮について(一三の一)



- (六・二三) 井上敏夫(海軍)
- (九・二三) 立田革(外務省)
- ( ) 杉村濬
- ( ) 田代安定
- (二一・二四) 柴山尚則(?)
- ( ) 田代安定
- ( ) 深堀順藏(領事官)
- ( ) 加藤増雄(公使館)
- (三・二三) 上野専一(領事官)
- (六・二八) 阪本俊篤(海軍)
- (二一・二三) 片岡利和(侍従)
- (二一・二三、二二・一三) 荒井弟二郎(?)
- (二一・二三) 高橋昌(?)
- (二二・一三、二一・一) 恒屋盛服(?)
- (二四・二二、二八) 福島安正(陸軍少佐)
- ( ) 笹森儀助(探検隊員)
- (二二・二四、四・二六、五・二四、一〇・二五) 土耳其航海紀行(二三の二)
- ( ) 元山・京城紀行(一三の三)
- ( ) 加奈多形況之一斑(一三の三)
- ( ) 太平洋諸島経歴報告、非支(一三の四、五合・六・七)\*
- ( ) 朝鮮の河流(一三の六)\*
- ( ) サモア群島実検記(一三の八、九合・一〇・一二)\*
- ( ) 沿海州南部烏蘇利蘇城郡紀行(一三の一〇)
- ( ) 露国ウォルガ河沿岸旅行(一三の一・一二、一四の四、五合・六、七合)
- ( ) 台湾嶋実践録(一三の一・一二)
- ( ) 南洋航海紀行(原稿なし)
- ( ) 北海道千嶋巡回中の現況(原稿なし)
- ( ) 新加列斗泥亜嶋経歴報告(一四の六、七合・八、九合・一四の二)
- ( ) 新ヒブリード島探検上の要旨(原稿なし)
- ( ) メキシコ探検上の実況(一四の八、九合・一〇・一一・一二)
- ( ) 亜細亜大陸単騎遠征記(一四の一〇・一一統) 葉書通信
- ( ) 千島探検要報、占守島の部(一四の二)

右のうち田代安定は早くから東京地学協会から援助をうけ、太平洋諸島を巡回して調べていたものであるが、住民・氣候・植生・物産・言語などを記している。研究というよりは資料の収集という段階であるが、幹事渡辺洪基は第十一年会（明二三・五・二七）の総括報告でこれを評して「……群ヲ抜イテ精確詳明ヲ尽セル譽アルヘシ……前人記ス所ノ紀行若クハ圖書ノ淺陋ヲ襲ハス、別ニ生面ヲ開キテ我學術社会並航海貿易社会ヲ裨益スル甚大ナルヲ見ントス、蓋シ此種ノ報告ハ本會曾テ所期セル旨趣ニ嵌合シ尤モ敬重ヲ加ヘサルヘカラサルナリ」と記している。

また福島安正少佐は明治二十五年二月ベルリンを発し騎馬でシベリアを横断し、九月蒙古へ入り、クーロンより再び翌年一月露領チタに入りブラゴエベンチンスクより満洲を通過して浦塩へ出る大旅行をしたのであるか、途中、ほとんど連日日本へ出した葉書短文（誰にあてたものか不明、多分軍人仲間か）と、陸軍參謀総長あての折々の旅行状況報告を載録してある。二十六年六月、東京に帰着したとき世間の大歓迎を受け、東京地学協会も会員として特製の銀製記念章を贈っている。『協会報告』所載のものは当時の新聞雑誌の記事とはちょっと類を異にしていたので、会員に対する価値があったのかもしれないし、あるいはまた『協会報告』の原稿難で連続掲載したのかもしれない。同少佐の帰朝は明治二十六年で『協会報告』の第四期に入ってからだが、途中の通信文が第十四巻の後尾の部分に入っている。

そのほかには加藤増雄のロシア南部の旅行、恒屋盛服のメキシコ旅行談などが、ビビットに時代と場所を書き出している。

第三類の自己の調査研究というものも、なかには●印のものは一般事情の説明ともいふべきもので第二類の紀行の

なかの\*と類を同じうするものが含まれる。しいて言えば\*は自己の見聞を基礎としているのに対し●は学界一般の見解を中心としているともいえよう。

明三

リース(文科大学) 歴史攻究の仕組(続、一一の四)●

坪井正五郎(文科大学) アイヌの婦人(一一の六)

若林勝邦(?) 陸奥に於ける石器時代の遺跡散布図略解(一一の七)

明三 (一一・三) 北沢正誠(東京市区長) 荒川分水運河説(一二の八)

明三 (二・二五) 神保小虎(北海道庁) 北海道地勢と地質鉱物の話(一一の一一)●

(四・二九) 堀正太郎(農学士) 北海道の山林(原稿なし)

明二四 (一・二七) 多羅屋忠郎(?) 北海道の鉱山(原稿なし)

(三・二四) テーロル(アメリカ艦長) ニカラガ運河開鑿企業について(一二の一〇)

(三・二四) 神保小虎(北海道庁) 北海道探求の進歩(一二の一〇 || 一二合併号)

( ) 高島嘉右衛門(実業家) 印旛沼開鑿之説(一二の一〇 || 一二合併)

(三・二四) 永田方正(北海道庁) アイヌの言語及び北海道の地名

(五・二六) 富士谷孝雄(理科大学) 日本の寒暖(一三の一)●

金田権太郎(地質学者) 東亜気象一斑(一三の一)●

(六・二三) (英誌翻譯) ラヴェンスタイン、地球上尚歐人の殖民に利用すべき土地(一三の一・二)

金田権太郎(地質学者) 日本東岸実見記事(原稿なし)

鈴木券太郎 (協会書記)

馬場 信倫 (気象学会)

板本 武揚 (外務大臣)

巨智部 忠承 (地質調査所)

肝付 兼行 (海軍)

小藤 文次郎 (理科大学)

佐野 常樹 (?)

大塚 専一 (地質調査所)

神保 小虎 (理科大学)

宮部 金吾・仲保 小虎

山下 伝吉 (地質調査所)

上野 専一 (領事)

在香港 某氏

(一〇・二五) 坪井 正五郎 (文科大学)

上野 専一 (領事)

適士 論 (一三の三)

難波 船と暴風警報 (一三の三・四〇五合)

西伯利 鉄道設計察報 (一三の四〇五合・六) 他誌より転載

尾濃 越三国震災地視察結果 (一三の七)

西比利 亞鉄道に対する日本の開港場を論ず (一三の八〇九合) 他誌より転載

地震考説 (一三の八〇九合) 他誌より転載

比律 菲嶋に於ける支那人及び日本人 (一三の八〇九合)

釜石 四近の製鉄材料 (一三の一一) ●

北海道 樹木帯播布の事 (一四の一)

北海道 アイヌ語植物名詳表 (一四の一) 四二頁

徳島 県水害地地質調査 (一四の二〇三合)

南清 厦門港の貿易 (一四の二〇三合)

呂宋 群島事情 (一四の二〇三合)

巴拿馬 運河の現況 (一四の二〇三合・四〇五合)

地理学上知識の拡張が人類学上研究の進歩に及ぼせる影響 (一四の四〇五合) ●

南清 地方貿易概言 (一四の四〇五合)

墨西哥 国要況報文 (一四の四〇五合・六〇七合・八〇九合) 地学雑誌

田代安定	台湾島事情一斑(一四の六〇七合) ●
瀬戸正二(?)	布哇国ホノルル港門浚渫始末(一四の八〇九合)
田代安定	薩南中之島実地調査報告( )
明二六 (二・二八)	北海道の炭鉱について(一四の一〇) ●
坂市太郎(地質学者)	南洋貿易上の地理(一四の一〇)五〇頁
(三・二八)	支那における日本の貿易(一四の一〇)
稲垣満次郎	
上野専一(元領事)	

右にみるように、あるものは概説であったり、商品学であったりで、第二類のあるものと区別するのは無理であるが、そのなかでもっとも特色のあるのは、北沢正誠の利根川の水を荒川へ落し、荒川の水を巢鴨から小石川区へ分水するという案で、本郷・小石川区長として工事の案と経費なども計算して実地に検分している。当時、運河熱が日本で高かったらしく、アメリカ軍艦の艦長がニカラガ運河について講演し、協会内部にもニカラガ運河委員会ができて約一年間、委員が討議して調査報告書を編んだ。高島嘉右衛門も印幡沼の開鑿の説を演説し書いている。

また稲垣満次郎は geographical point of view から南洋をみると述べて、日本が東洋政策上、どれだけのことをしなければならぬかと、日豪間の貿易・市場・航路等の開拓の必要を説き、殖民政策上、国庫の収入をふやす保護貿易でなく殖民地を繁栄せしむべきことを力説し、日本人は南洋に殖民できるかどうかと問うている。

あとは地震・地質・気象・港湾などのテーマがあるが、とくに深く研究調査したというものは少なく、他誌よりの転載もある。

『協会報告』の刊行月次

明治 年度	1号 (4月)	2号 (5月)	3号 (6月)	4号 (7月)	5号 (8月)	6号 (9月)	7号 (10月)	8号 (11月)	9号 (12月)	10号 (1月)	11号 (2月)	12号 (3月)
12	23	5.30	6.30*	9.30		10.30	11.30	12.30	1.30	2.28	3.30	?
13	24	6.30*	9.30	10.30	11.30		12.30	1.30	2.29		3.30	4.30 5.30
14	25	6.30*	10.15		11.15		12.15		1.15		2.25	3.25 4.26
		1号 (4—6月)			2号 (7—9月)			3号 (10—12月)		4号 (1—3月)		
15	26		8.28**		12.16			3.31		5.18		
16	27		8.28**		11.24			4.12		5.31		
17	28		9.4**		11.19			2.19		8.9		
18	29		10.14**		12.25			3.7		7.10		

\* 前年の年会記事号添付(別冊)      \*\* 巻頭に前年の年会記事

第三期の全体を通観してみると、個々の報告演説の内容はともかくとして、人と話題に困却し原稿難になやんだことがうかがわれる。第十二、十三巻とも合併号を二回出し各年十冊づつ、それに前年度の年会記事を別頁で一冊分にあたる位、ある号に付載している。とくに第三期の最後、地学会を合併吸収する直前の第十四巻のごとき、明らかに編集難が目に見えるようである。『協会報告』も二・三号(五・六月)、四・五号(七・八月)、六・七号(九月)、八・九号(十一月・十二月)と合併号として一年に八冊しか出さなかつた。

**地学会との合併** 会館をもち財政豊かな東京地学協会の『協会報告』が編集・発行の困難なのに対し、地学会の『地学雑誌』は研究者・執筆者を多数もつ上に、農商務省地質局の地質及び土性に関する公式の記事を掲載する囑託を受けたので、当時の学術雑誌としては比類のない売行きを示したことは前に述べた。しかしもとより豊かな資金もなく、関係者一同で事務をとるといふ状況であつた。<sup>(34)</sup>

こういふなかで東京地学協会と地学会との合併が行われた。昭和五年に出版された『東京地学協会沿革誌』によると

「明治二十五年十二月、目的を同うせる東京地学協会及び地学会の両会合同の議起り……（協会は）花房義賢、北沢正誠両氏を協議委員に選定し……地学会協議委員和田維四郎、横山又次郎代理鈴木敏の二氏と臨時協議会を開いて諮り規則変更の草案を起し、十二月二十五日東京地学協会は臨時総集会を開き、同会員及地学会員多数出席し全員の承諾を得て合同茲に成立し……」

となつてゐる。これが公式の記録であるが、現実の合同の経緯は同年、横山又次郎が生々しく書いてゐる。

「地学会と地学協会とに至つては、互に見ぬ振りをして、明治二十五年まで単独行動を取つてゐたが、此の年の秋、当時協会の会員となつてゐた故坪井正五郎氏が一日、予に次ぎの如く言つた。「東京地学協会も此の頃遣り手がなくなつて行き詰つてゐる。どうかして之を遣つて行つては呉れまいか」と。乃で予は「君自身遣つたらどうだ」と言ふと、坪井氏は「僕は人類学者で地学者でないから遣れない」と返答した。此の時予は心中意つた、地学者でない人々が集つて、地学に関する協会を設けて永く之を維持して行くことの能きないのは、是れ自然の帰結であると。そして坪井氏へ予一人で事に当るのは如何かと思ふから、一先地学会その物に相談してその上で否やの返辞をするからと言ひ置いて、次ぎの地学会の開けた時、前の事を之に持出して見た。すると種々の議論はあつたが、結局地学会全体が向ふに乗り込んで行つて事を仕よう。それには二会の合併が必要であるということになつて、その合併の事を協会に申込むと、それには条件次第で異存なしとの挨拶であつたから、予と和田維四郎氏が交渉委員に選ばれて、当時協会の牛耳を執つてゐられた故男爵花房義賢氏の邸に往つて、合併の条件を取り決めた。云々」（横山又次郎、地学雑誌の今昔、「地学雑誌」四二年五〇〇号、昭和五年十月）、なお、この合同を小藤又次郎は「協会員神保小虎等の発起にて」としてゐる（小藤又次郎、地学雑誌の由来、同誌、同号）。

けつきよく合併の真相は第三期の、とくに終末の第十四巻にみられた『協会報告』の編集の行きづまりである。

東京地学協会財政 (銭位切すて)

(収入の部)

明治 年度	年	醸金	会館貸 与料	雑誌売 払代	利子	保統資金よ り繰り入
14	25	346	430	115	1129	960 <sup>1)</sup>
15	26	423	563	436	1180	874 <sup>2)</sup>
16	27	322	579	401	1150	992 <sup>2)</sup>
17 <sup>3)</sup>	28	223	451	117 <sup>4)</sup>	1150	358 <sup>5)</sup>

- 1) 前回までの通り図書印刷費。
- 2) 経常費の不足。
- 3) この年、従来的大幅形式を改め薄記とし、保統資金の利子をも合せて収入とする。
- 4) 出版物収益。
- 5) 前年までは保統資金利子は特別会計で積立てていたから、その方式にすればこの年  $1150 + 358 = 1508$  が繰り入れられたことになる。

(支出の部)

俸給	図書費	「報告」 印刷費	「雑誌」	「図書」	研究費 <sup>1)</sup>	贈与響応		
14	25	692	46	501		202		
15	26	630	85	129	692	10	142	
16	27	783	37	133	631	708 <sup>2)</sup>	100	15
17	28	737	—	541 <sup>3)</sup>		173	170	

- 1) 調査嘱託の費用として新設。
- 2) この年、朝鮮地図等出版のためか。
- 3) 収入の部の 4) とともに算出の根拠不明。

(34) 地学会はかくして創刊(明二二・一)から合併(明二五・一二)までに嘗々として約千円を積立てた。地学雑誌は頒価一部十銭で、正員は一か年五円、準員は一円二十銭を拠出していた。合併後はこの金を基として地学倶楽部という旧地学会員の同好団体をつくり(会費一年四円、後に加入金二〇円を徴する)、会費と積立金の利子で春秋二期の懇親会を開き、吾妻山噴火で調査中遭難した三浦技師らに弔慰金を呈したり、従軍地質学者に品物を贈ったりした(鈴木敏、東京地学協会と地学倶楽部、地学雑誌、五〇〇号、昭和五年)。その三十年後、わたくしよりも兩三年前の地質・地理学科の卒業生は先輩から地学倶楽部のご馳走になった由である。地学倶楽部は現在資金はないが、なお社交的団体として残っており、年数回の談話会を東京地学協会の肝入りで行っている。

ここで合併前の協会の財政をみると、動産として公債額面二万二千円余をもち、その利子だけで一一〇〇円をこえ会館収入も四〇〇円をこ



えており、その上、保統会計から図書印刷費が七〇〇円も繰り入れてなお、協会の財政は毎年二〇〇—九〇〇円の赤字で資産がふえている。それが合併後二、三年にして大いに様子がかわってくる。印刷費の増大と多数の出版物の発行。このままで過せぬことが予想される。明治十三年以来、特別会計として積立ててきた保統資金も図書印刷費の經常費繰入れだけではすまなくなりそうな雲行きとなる。

会計表を一覧すれば、年釀金（会費）の収入がへってきているのは『協会報告』の発行不順調を反映するものか。旧地学会員は免費会員として入会した。会館は万年会、アジア協会などに事務所を貸すほか、臨時に講堂などを貸したらしく会館貸与料をあげている。支出では贈与饗応は初期ほど多くなく「盛大ナル讌会」はあまりないようであるが、何分にも俸給、手当などの人件費が多い。横山又次郎のいう「世帯の大きい為」（後述）四、五人の事務員・小使がいたのでなかるうか。

#### 合併による第四期の演説・報告

合併のときの条件は、（一）会名を東京地学協会とすること、（二）『地学雑誌』

はそのまま月刊で東京地学協会で刊行発売すること、（三）『東京地学協会報告』は季刊とするが、もとの通り会員にだけ配布すること、<sup>(35)</sup>（四）地学会々員中の准員と称する者は東京地学協会々員とせず、正員三〇名だけを会員とする<sup>(36)</sup>こと等であった。

（35）横山又次郎の追憶（地学雑誌、五〇〇号、前掲）で合併の条件として『協会報告』を廢刊として地学雑誌一本とするとあるが、これは誤りで『協会報告』が廢刊になったのは後述のごとく四年後である。

（36）准員というのは雑誌代だけ払っていたもので学生や一般読者であり、正員は大学・地質局の職員・卒業生である。准員を

協会の会員としないことは「協会が甚しく貴族的であった為で、旧地学会員もこれだけは止むを得ないこととして、協会の意見に従った」(横山又次郎、前掲)。正員三〇名が協会にうつることになつて、合併の取きめに氏名がのつているが(『協会報告』一四の八・九合併号)、翌年春の第十四年会記事(『協会報告』一五の一)によると二九名の氏名があげられている。

こうして協会員となつた二九名中から和田維四郎、横山又次郎の二名を新たに議員(もと一八名)に加え、幹事に従来の渡辺洪基、花房義質、北沢正誠、會我祐準の四名に加えて和田が入つて五名に増した。このように新しい執行部に従来の華族・官吏・軍人に加えて、地学研究者が加わつたので、『地学雑誌』は経理上の心配がなくなつたであろうが運営の方にはあまり参加できなかったようである。<sup>(37)</sup>

(37) 「旧地学協会の役員達も又勉めて(議員会に)出席された。これは旧地学会員の行動を監視する為であつたと思はれた……予らは合併によつて學術の研究や探検が幾分か容易に行はれると楽しんでた……しかし是れは極めて小規模のもの外、行はれなかつた。その故は経費があつても身代が大きい為に支出もそれだけ多くて、他へ流用され得るものが少なかつたからである」(横山又次郎、前掲)。

『協会報告』はもともと編集陣がないので、地学会から移つてきた地学研究者の手がだんだん多くなる。まず『協会報告』第一五一―一八巻の内容をみよう。前と同じく(一)沿革・歴史派、(二)旅行見聞派、(三)研究調査派の三つとすると、第一類は全く振わず、わずかに前半の二年間に次の三つの演説があつただけであり、しかもそれは『協会報告』には投稿されなかつた。この派を代表する北沢正誠が小笠原島に転出して幹事を辞し、赤松則良に替つたことも関係しているだろう。おそらく講演者の世話選定をし、かつ編集を担当するようになった「地学者」たちの趣味にあわなかつたのと、学界としても純粹に歴史的な内容のものは従来の中国風の地理学からも分離するようになった

のでもあろう。

明二六

(四・二五)

北沢正誠 高岳親王羅越國墳墓考

(五・二三)

山本鏡介 暹羅國遺話

明二七

(四・二四、五・二二、六・二六)

山吉盛義 西卑利に於ける清露國境の交遷

第二類の旅行見聞談は相かわらず多いが、前半にはトラック島の王弟とその姻戚という二人をよんで坪井正五郎を問答委員として種々雑然たる質問をしていたり、例の通り軍人・実業家・学者の話を聞いているが、後半になると日清戦争後の占領地の視察談や新領土、台湾の話がとみに多くなる。それには小村寿太郎・長岡護美など外務省系や軍人の話もあるが、主派は博物系の学者になって、ここに『協会報告』も前期のものとはやや異質になるが、東京地学協会そのものもこれを契機にその性格をかえはじめるのである。

明二六

(六・一二)

志賀田順太郎(実業家)

トラック島の生活事情(一五の二)

福島安正(陸軍中佐)

亜細亞大陸単騎遠征誌統(一五の二)(參謀総長あて報告)

(七・一三)

福島安正( )

単騎旅行話(一五の二)(一四年会の講演)

(九・二六、一〇・二四、一一・一九)

足立忠八郎(清国留学八年)

清国旅行記(一五の二・四)

明二七

(一一・二八、一・二三)

福島安正(陸軍中佐)

バルカン半島旅行記(原稿なし)

(二・二七)

上原勇作(陸軍少佐)

印度支那旅行記(原稿なし)

(三・二七)

中島裁之(?)

支那談(一六の二)

(三・二七)

北沢正誠(東京府)

小笠原島近情(一五の四)

(四・二四) 三成文一郎(農学士)

(五・二二) 松岡好一(?)

(一〇・二三) 神保小虎(理科大学)

(一一・一三) 阿部敬介(?)

—— 石川貞治(農学士)

明二八 (三・二六) 小村寿太郎(外務省)

(三・二六) 根本正(?)

(六・八) 足立忠八郎(?)

(六・二六) 長岡護美(もと外務省)

(六・二六) 杉野宋太郎(?)

(七・六) 志賀祐五郎(?)

(一〇・二三) 橋口文藏(台湾総督府)

(一〇・二三) 神保小虎(理科大学)

(一一・三三) 郡司成忠(報効義会)

明二九 (一一・二八) 伊沢修二(?)

(二・二五) 西和田久学(?)

(五・二六) 長野義藏(陸軍中尉)

(六・二三) 田島応親(陸軍大佐、移民監督)

隠岐土産(一六の一)

濠州の北門(和歌山移民と木曜島)(原稿なし)

シベリア南部の旅行(一六の二)

北水洋探検実況(一六の三)

千島巡検雑記(一六の三)

占領地見聞談(安東県地方)(原稿なし)

南米及中央亞米利加紀行(一六の四)

滿州地方旅行談(原稿なし)

清韓巡回見聞談(一七の一)

ヒリッピン群島探検実況(一七の一)

朝鮮事情(一七の二)

台湾事情(一七の三)

遼東半島巡回探査上の小話(一七の三)

千島国占守島探検談(一七の三・四)一九六頁

台湾事情(原稿なし)

朝鮮国鈺山の調査状況及同国内地の情況(一七の四)

台湾生蕃地探検談(一八の一)

南洋ニューカレドニア事情(一八の二)

(九・二三) 横山莊次郎(農学士)

台湾事情(一八の二)

(一〇・二)

石井八万次郎(地質)

北部台湾旅行(一八の三)

明三〇

神保小虎(理科大学)

遼東半島占領地の地理・地質巡検の報告(一八の三、四、未完)

(一一・二三)

本多静六(農科大学)

モリソン探検談、付 生蕃事情(一八の四)

第三類の研究調査的のものでは旧地学会々員のもの、すなわち地質学関係のものが俄然多くなる。これは東京地学協会の変貌の前ぶれ、あるいは第一歩といつてよい。次に示す三四篇の報告のうち四割が旧地学会員の地質学関係、あとは従前通りの商工業関係と人種・考古学関係が同数で合せて五割を占めている。

明二六

(四・二五)

フォンデス(イギリス船長)

地理学教育と仏教との関係(一五の一)

(四・二五)

三浦宗次郎(地質調査所)

鳥海山の記(原稿なし)

——

三浦宗次郎( )

五・一九吾妻山破裂調査概況(一五の一)

——

鴨下松次郎( )

六・四吾妻山の噴泥及び噴灰(一五の一)

(七・二五)

比企忠・西和田久学( )

故三浦理学士吾妻山遭難実況(一五の一)

——

鈴木敏( )

一切経山再破裂後、故三浦技師一行登山の結果(一五の一)

(九・二六)

小金井良精(医科大学)

アイノ人種に就て(一五の二)

(一〇・二四)

横山又次郎(理科大学)

吾妻山の破裂(一五の二)

明二七

(一一・二三)

和田維四郎(前地質調査所長)

東洋に於ける製鉄事業(一五の三)

——

巨智部忠承(地質調査所)

生野探鉱地の地勢と地質(一五の三)

(五・二二) 曲木如長(もと駐露公使館) 日露貿易に就て(一六の一)

(六・二六) 横山又次郎(理科大学) 火の球の話(セントエルモの火) ①(地学雑誌、九一二月号に登載)

(九・二五、一〇・二三) 西和田久学 種子島・屋久島探検報告(一六の二・三・四) \*

(九・二五) 曲木如長(もと公使館員) 朝鮮の商工業(一六の二)

(一一・一三) 神保小虎(理科大学) アイノの地名単語(原稿なし)

(一二・二二) 神保小虎( ) 日本地理学上に於けるアイノ語の要用并に其研究法(一六の四)

明二八

(一・二二) 神保小虎( ) 地勢に關するアイヌ并に日本の単語(一六の四)

(一・二二) 藤田敏郎(?) 墨西哥國の歴史及び現今の状況(一六の四)

(四・二三) 中島謙三(理学士) 本邦石油の産所(一七の一)

( ) 近藤会次郎(工学士) 本邦の石油事情(一七の一)

(九・二七) 神戶応一(もと領事) 露西亞に於ける日本紅茶販路開設上の実況(一七の二)

明二九

(三・二四) 野中至(氣象) 富士山頂における氣象観測の事実(一八の二)

(三・二四) 神戶応一(もと領事) シベリア鉄道の影響(原稿なし)

(五・二六) 鳥居竜藏(文科大学) 遼東半島における高麗の遺跡及び唐代の古物(一八の二)

(六・二三) 佐藤伝蔵(理学士) 陸奥亀ヶ岡石器時代遺跡地質及び発見品(一八の二)

金沢庄三郎(文学士)

蝦夷語方言藻汐草の校正(一八の二)

八〇頁

- (一〇・二七) 八木英三郎(?)
- (一一・二四) 鈴木於兔平(?)
- (一二・一五) 神保小虎(理科大学)
- (一二・一五) 石原初太郎(地質)
- <sup>明三〇</sup>(一二・三三) 肝付兼行(海軍大佐)
- (三・二三) 伊木常誠(地質調査所)
- (三・二三) 佐藤伝蔵(理学士)
- (一八の三) 武蔵国に於ける古墳の地理的分布
- (一八の三) 西伯利亚に於ける日露貿易の将来について
- (一八の三) 甲斐国南巨摩郡亀裂地の話
- (一八の四) 駿河湾の天の橋立について
- (一八の四) 世界既往の築港について(原稿なし)
- (一八の四) 三陸津浪地方実査の話
- (一八の四) 太古の武蔵野について

地質学関係のなかでも福島県信夫郡の吾妻火山のものがとくに多いのは、明二六・六・七に新会員として旧地学会から加わってきたばかりの三浦宗次郎(地質局技師)が西山惣吉技手とともに調査中、噴火が起り殉職したので地質学界から多数が調査に出かけ、協会も横山又次郎を特派して調査せしめたからである。協会は前にも濃尾地震(明二四)については巨智部忠承の演説(『協会報告』一三の七)を聞いているが、吾妻山噴火とは比較にならぬ山体の何分の一かを吹きとばした磐梯山の噴火爆裂(明二二)については一つの報告も演説しかなかったのは、自然災害についてはあまり関心がなかったのであろう。しかし会員の殉職死亡によって多数の報告をさせたことから、その後、三陸津浪地震(明二九)についても伊木常誠の演説(『協会報告』一八の四)を聞いている。

旧地学会員を包含したことが、災害についても協会の幹事に興味あるいは関心をもたせたのであろうが、それは自然科学的現象としてのみ把握されたのは、報告者が地質学者で地質以外には何の関心も示さなかったからである。し

かもそのあるものは役所の報文のごとくであったり、詳細は學術雜誌『地学雜誌』にゆずるといふ風なものもあった。人間社会の方により関心をもっていたであろう協会側が遠慮もあってそれをとがめることもできなかったであろうし、また当時は災害といえば仁慈的救済が唯一の対策であったので学問上の問題ともならず、講演会の話題にもならなかったであろう。(田中正造の鉱害運動のごときは原因が人為的なものであったから社会的にとりあげられたので、火山・地震・洪水などの自然災害を社会的問題として扱うのは、もっとずっと後になってからである。)

アイヌ・人種学・言語学関係があるのは神保小虎の、考古学関係は坪井正五郎の影響であったのであろう。ともに協会の運営について幹事を補佐していたのである。この期間、特色のあったものは、

(一) 通信会員フォンドスが「仏教の哲学性を高く評価し日本の欧化思想を排した」もの(年会の報告による)。  
 じっさいには演説は表題でもわかる通りシロウト的地学協会的のものであったらしく、『協会報告』の載録(猪間収三郎書記譚訳)もあまり論理的なのではない。

(二) 和田維四郎が独立国としての鉄の必要を説き製鉄事業は大いに利益があるから我国にそれを起すべきことを説いたもの。(三年後に日本最初の官営八幡製鉄所の長官になった。)

(三) 西和田久学の種子島・屋久島の報告は東京地学協会が自前で調査費を支出して行った最初のものであるが、調査の意図もはっきりせず地誌的資料の演説であった。

(四) 野中到の富士山頂の気象観測は当時、世間の話題となったものであり、そういう演者・話題をとりあげて専門外の会員が聞くというのが、地学協会の考え方であり、一つの意味のある行き方であった(これは今日にも通用す



る方法で、単一の専門学会に求められないところであるが、運営には高度の配慮が必要であらう。

この期の特徴の一つは例会の演説がすべて、「私ハ……トイフモノデゴザリマシテ、今晚コノ席ニ出マシテ皆様ノ前デ話シマスコトハ誠ニ光栄ノ至リデゴザリマス」式の口語体そのままで長々と書かれていることである。口頭の談話であるから文章としては冗長であるばかりでなく、話者がきわめてヘリ下っているところが印象的である。これは同時代に協会から併行して出ている『地学雑誌』の学界雑誌的なのとは雲泥の差であった。

### 『協会報告』の廃刊

第四期には日清戦争があったので、時世の需要に応ずるためか、朝鮮全図(縮尺一六〇万分

一)、北支那三省地図(付、三省地名箋、三省府県統属表)(縮尺、同前)、台湾諸島地図等を出版し、台湾諸島誌(神保小虎校閲、小川琢治著)を出版しているが、旧地学会に属する研究者たちはどれ位これに関与したであらうか。

一方、日清戦争後の印刷費の騰貴は会計上、『協会報告』と『地学雑誌』の両方を維持することを困難にし、<sup>(38)</sup> ついに従来、会員にのみ頒布していた『協会報告』を廃刊とし、協会の録事・演説等は一切『地学雑誌』に毎月掲載して、一般に発売することに決定した<sup>(39)</sup>(明三〇・六・二二)。こうして『東京地学協会報告』は第十八巻第四号(明治三〇年一月三月号、明三〇・七・一〇刊)をもってその歴史を終わったのである。

(38) 明治二十九年十月の協会の記録によると、改正された印刷代は、『協会報告』一八〇円(一回平均四五円、部数三五〇部)、  
『地学雑誌』四八〇円(一回平均四〇円、八〇〇部)。

(39) 会長榎本武揚は誌名を相変らず『東京地学協会報告』か、あるいは『東京地学協会雑誌』としてはと提案したが、旧地学会員側から広く知られた『地学雑誌』の誌名を維持したいと申出して、そうきまった(小川琢治、地学雑誌創刊以後四十二年間の本邦地理学界の回顧と前途の希望、地学雑誌、五〇〇号、昭五)というのは合併時でなくこのときのことかと思う。

## 六 『協会報告』における地理学

東京地学協会が渡辺洪基等の首唱で創立され、未知の世界を自らの耳目で見聞した体験を知ろうとしたのは、極めてナイーブではあるが地理学の成立すべき根拠をつかんだものであるといえよう。江戸時代から続いた中国方志の伝統、すなわち多数の文献記録のなかから関係事項をあつめて地誌を構成する方法、あるいは当時の日本で進行しつつあった「皇国地誌」の調査編述の方法とは全く別のものであった。しかし東京地学協会やまたその『協会報告』が、理念の上においては新しく、かつ正しいものをもちながら、さしたる成果を今日に残さず、したがって日本の近代地理学につながらず、貢献することの多くなかったのは、何によるかを考えてみたい。

**例会の演説と会員の関心** 『協会報告』十八年間の例会の演説の年月日と題名は第三―第五章にあげたが、この演説

がどの程度、会員に聞かれたか、これを通じて会員がどれだけ関心をもったかをさぐってみたい。例会は最初、月末の土曜日の午後に行われていたが（七、八月休回）、十九年二月から第四火曜日の午後七時に開かれている。そして『協会報告』にはその例会の出席者名が毎回のせられているので、多少詮索にすぎないが、最初の五年間の出席人数を表示すると別表のごとくである。創立の年はとにかく毎回出席者四〇名近くを保っているが、年が明けてからは三〇名以下、さらに四年目からは二〇名以下となる。とくに出席者の多いのは、社会的に興味をひききそうなものに限られる。第六年以後も同様で出席者の多い例会の演説をあげると次の通りである。

第六年、九月三八名、小泉正保の交戦中の安南国近況見聞談、二月七十七人（うち会員二三人）伊藤弥次郎の日本鉱山沿革考、

東京地学協会の例会出席者数

明治 (年度)	4月	5月	6月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
12	1	?	39	39	38	28	39	31	41 <sup>1)</sup>	27	23
13	2	20	21	28	30	15	25	31	20	16	22
14	3	5	39 <sup>2)</sup>	27	23	18	若干	?	17	25	36 <sup>3)</sup>
15	4	10	9	41 <sup>4)</sup>	30	21 <sup>5)</sup> 23	12	8+α	8+α	17	19
16	5	19	—	21	18	19	13	10	18	12	69 <sup>6)</sup>

- 1) 榎本武揚のシベリア紀行.
  - 2) 西徳二郎の中央アジア紀行.
  - 3) 榎本武揚の千島疆界考第二回、佐野常樹の地下富源の概況.
  - 4) ナウマンの日本の地形・地質(終って招宴).
  - 5) 荒井郁之助の測量術沿革考、4日後に臨時会を開いて続行.
  - 6) 北畠道庵の歐亞用遊記(終って宴会).
- αは会員外の傍聴者のあることを示す.

渡辺洪基の台湾蕃語、山内堤雲の蝦夷古物展示、海瀬敏郎の韓地事情(このうちのどれが多数の会員外聴衆の興味をひいたのであろうか、地学関係者が伊藤の話に関心をもったものか、それともその他であるか)

第七年、一月五五名、一二月四一名、ともに大島圭介(当時、工部大学校長、兼学習院長)の武蔵国并東京古今沿革図識。

第八年、十月七八名、十二月五一名、二月六七名、ともに福島安正のインド紀行談。

第九年、六月、坪井正五郎の伊豆諸島風俗談(写真)と賀田貞一の沖繩の人物風景(幻燈)に七三名、十月、小藤文次郎の日本の旧世界に七六名、十一月、井上陳政の支那漫遊談に五九名。

第一〇年、九月、関谷清景らの盤梯山破裂実況(幻燈)に一五〇名、うち会員の夫人、令息令嬢ら十数名。

第一二年、十二月、岸田吟香の長江図説と田口卯吉の南洋事情大意、一〇四名、うち会員二九名、一月、アメリカ軍艦々長テロールのニカラガ運河開鑿企業に一〇〇余(うち会員一八名)

第一三—一四年の毎会、会員は一〇—二〇名であるが、会員外が数十名出席することもある(金田樞太郎の日本東岸実見記事と井上敏夫のトルコ軍艦遭難軍人送還談、稲垣満次郎の露国版図拡張史、全氏の南洋貿易上の地位など)。

第一五年以降、地学会を合併した後も会員の出席数は多くなく五—一五名にすぎず、最多数の聴衆のあったのは次の三つである。

明二六・一一の福島安正、バルカン半島旅行談（幻燈）、バルカン戦争直後の明二一・一〇—明二三・二までの古い旅行談であるが、同中佐はその春、シベリア単騎横断旅行で雄名を馳せたためか会員三六に対し一般聴衆一四三。

明二七・一・二三の会員一六、一般一二は福島中佐の続バルカン談か、それとも地質調査所長兼鉾山局長をやめたばかりの和田維四郎の東洋における製鉄事業の方が多数の聴衆を引きよせたのか。

明二七・一二・一三の会員一九、一般一六は神保小虎のアイノの地名単語よりは阿部敬介の北氷洋探検実況の方がひきつけたか（神保小虎は同年九月シベリアを横断して帰国、これは福島中佐とともに世間で有名であったというが、その前々月、一〇・二三のその旅行談の際には会員一〇、一般八四であった。）

その他第一五—一七年三八回の例会中、右述の三回を除いて一般聴衆は八〇人台三回、七〇—六〇人台二回、五〇—四〇人台六回という状態である。

べつに協会は聴衆の多いことを誇る必要もないが、会員の参集の少ないことは演説の内容が会員の関心をはずれており、協会の選択する演説の種類が会員にとって時世おくれになってきたのか、それとも会員の社会的地位がますます上昇して、こういう会合に出席する余暇がなくなったものであろうか。<sup>(40)</sup> いずれにせよ、例会そのものは初期のごとく会員のものであるよりは、終末期には会員外の一般聴衆のためのものとなったようであり、それも必ずしもつねに多数ではなかった。そして多数の出席のあった演題は、珍らしい異国の見聞談が主で、ほかには時事的政治経済にふれた講演である。

これを演説講演する側からみると、初期の外交官・軍人・文献沿革地理家のみよりは後期には実業貿易家や学者研究家にもひろがったが、後期のそれらの人選が前期のそれほど多彩でないのは、幹事が熱心でなくなったためか、外交官・軍人以外の世界には幹事の能力では無理であるのか、それとも東京地学協会が講演に値しない会とみられたか、あるいは協会の気風が肌にあわない人が多くなったためか。原因は一つではないだろうが、わたくしは設立当時もともと先端的であった渡辺洪基の方針と思想が固定して若返えらなかつたことにあるように思う。

(40) 桂太郎は協会創立の時には会則立案委員となり、創立後、明治十七年春まで幹事をして毎月の議員会にも出、例会にも第一年二回、第二年四回、第三年五回と出席している。彼は明治三年八月から三年間のドイツ留学、八年から駐ドイツ公使館付武官として西欧の空気を吸い、協会創立時は帰朝の翌年でまだ陸軍中佐であったので、協会の事業にも精勤し得たのであろうが、明治十七年春、大山陸軍卿の欧州視察に随行として日本を離れ、帰国後は十八年陸軍少将、陸軍省総務局長、十九年陸軍次官、以後、軍制の中枢部に坐するようになっては、とうてい協会の運営にはタッチする余裕はなかつたであらうことはもちろん、例会に出席することも容易でなかつたことは想像できる。これは桂太郎に限らず、北白川宮会長、榎本武揚、鍋島直大、両副会長にしても、またその他の有力会員もあるいは大臣となり公使となり、枢密顧問官、貴族院議員等となつて、社会的に多忙になり、副会長、幹事、議員なども協会との関係は単に管理的会合に顔を見せることが出来るか、それもできないかという程度となる。本質の意味で協会に近い関係があつたのは多数の文化的団体に行政的手腕をふるつた渡辺洪基、旧地理局的行政官であつた北沢正誠、その他は、学究的な塚本明毅(地誌課)、荒井郁之助(気象台長)らであつた。

『協会報告』の国際的性格 東京地学協会は第一章にみたごとく、会員の社会的地位を敲選して品位ある階級の集団たらしめんと心掛けた。純粹の社交団体ならばその構成メンバーはもちろん、集会も刊行物も限定されるのも、当然一つの行き方であらうか、日本の Geographical Society としては果して妥当な態度であつたかどうか。

集会については創立期の渡辺洪基らが西欧において経験した Geographical Society の必要を強調する意識が各会員にあればまだしもであるが、既にみたように三年目には早くも出席者一〇人以下の例会もある。しかもこの集会の演説が二か月ないし六か月おかれて『協会報告』となり、一五〇名内外の会員に配布される。「右ノ報告ハ本会社員、通信員并ニ本会ニ関係スル内外有名ノ協会ニハ無代ニテ之ヲ贈リ、他ニ所望ノ人アレハ相当ノ価ヲ以テ之ヲ売与フヘシ」(会則、第三条ノ二)としており、地学会と合同後の、『協会報告』の廃刊数か月前の明治二十九年十二月には「部数をかぎり一般に売渡すも不苦事」ときめているにかかわらず、『協会報告』の表紙には第七巻四号(明一八年七・八・九月)以降毎号廃刊にいたるまで「禁売買」と書き、閉鎖的な態度をとりつづけた。協会の心掛けたのは右の個条の前段、外国の協会との交流であつたらしく見える。毎月第四土曜日(後に火曜日)に例会を開くほか、第二土曜(後に火曜)には議員会を開き運営を議した。議題は協会の諸行事・入退会の承認とともに外国との交渉であつた。明治十年代当時の民間の団体でこれほど国際交流をしたものは他に類をみないのでなからうか。後年の鹿鳴館的意識からであつたか、それとも Geographical Society の性格からであるのか。すでに第二年会(明一四・四・一六)の報告によると、通信を交換し機関誌を交換しているのは、ベルリン・ロンドン・ウイン・バリ・ローマ・トリノ・ベルン・リスボン・メッツ・ハルレ・セントペテルスブルク・アルゼンチナ・蘭領インド等の地理学協会があり、明治二十四年のころをみると、この他にマンチェスター・ブレイメン・イエナ・ミュンヘン・リヨン・リール・ハーブル・ヌーシヤテル・ジュネーブ・ルーマニア・ハンガリー・フィンランド・ベルギー・アメリカ合衆国・北フランス等の地理学協会、その他アメリカ合衆国地質調査所・カナダ学術会・イタリアアフリカ学会・蘭領地学局・チリ工業省・フラン

ス外交学会・ウイン東洋博物館などの諸機関にも及んでいる。

日本の Geographical Society として国際的に体面を保つことに協会はかなり力を注いだものといえよう。年会における会長演説や幹事の年間報告にも国際交流ないし外国の地理学協会との比較がでてゐる。

「今や本会独立維持ノ方法既已ニ立タレハ宜シク此ヲ以テ足レリトセス、更ニ進ンテ前人未ダノ學理ヲ講究シ之ヲ實用ニ供シ世運ノ進歩ニ後レス、又当初ノ規画ニ背カス前途益盛大ヲ致シ、外ハ歐米各國ノ協會ニ愧ツル莫ランコトヲ是望ム……」  
(第八年会・明二〇・五・一一、会長演説)

「本会ノ目的遠大ニアリテ鏘録ノ利得ヲ衍ハス、又一時ノ虚名ヲ事トセザルヲ以テ世人動モスレハ則之ヲ迂遠視シ、甚キハ天下ノ耳目ヲ以テ自カラ任スル者ニシテ帝国唯一ノ地学協會カ隠然勢力ヲ潜養シテ皇室ノ為メ国家ノ為メ地学ノ光彩ヲ顕彰シ、以テ學術ニ以テ貿易ニ、其便益補助ノ樞機タルヲ勤メ茲ニ二年所ヲ費セルヲ知ラス、又其ノ将来ノ國家ニ期セル宏且大ナル所以ヲモ弁マヘス、漫然トシテ本会ノ事業他國ノ同會ニ加カサルヲ嘲笑シ、惘然トシテ其ノ何カ故ニ進歩ノ緩漫ナルヤモ度外シ、冷然トシテ其短所ヲ究キ以テ得々タラントスルモノナキニアサラリキ……本会ヲシテ実ニ帝國唯一ノ器闔トシテ上皇基ノ隅石タリ、下民衆ノ柱礎タルノ重任ヲ竭サシメンコトヲ励ムヘシ」(第十一年会、明二三・五・二七、渡辺幹事年間報告)

皇帝とか国家とかの言葉がしきりに出てくるのは、協会特有のことか、それとも当時の世相か。明治一〇—一三〇年代という世界的にも帝国主義的色彩の強い時代、日本もまた富国強兵・殖産興業を謳った時代に、東京地学協会だけがその圏外にあることはなかった。数学や博物諸科、哲学や倫理学などの諸学会よりはむしろそれに近接した位置にあったといえる。会員は官辺要路の大官と軍人、それに皇室の藩屏たる華族を多数かかえ、加えて皇族を会長に頂い

ているという自負と自重から、いやしくも政府・国家に対して批判的な言辭に出ることは考えられないし、講演者もそういう色合いのものは皆無である。(初期のころ佐野常樹が政府の海運会社助成策を批難しているのがおそらく唯一の例外であろう。)しかしそれだからといって協会はとくに国家主義的な信条をあらわにせず行動もしなかった。アカデミズムとパトロン しかし協会が日本文の『協会報告』を刊行している以上、国内にもそれを頒つべきであるのに、前述のように「禁売買」としていた。協会の性格が「之ヲ編纂出版シテ社員ノ講究ニ供シ、及ヒ公衆ニ報知スル事」(会則第一条)の前段、社員の講究に供する方に重点があつたためか。すなわち限られた少数の国民の上層階級に位する会員が、地学に関する世界事情を吸収し各自の政界・官界の処世上の知識とするという態度であつたであろう。この姿勢は地学会との合同の時期にいたるまで、基本的には變つていない。

考えてみれば、もともと社交機関的性格をもっている協会としては、これらのことはべつに批難さるべきことではないし、『協会報告』の内容が学問的な高度のものでなくとも差支えなかつたともいえる。しかし諸外国の地理学協会がたとえ発生はそれと同じであっても、ある時期になればアカデミズムと手を結んで運営し、その出版物の編集発行に力をそそいだように、東京地学協会も日本の Geographical Society として運営されたならば、日本の地理学もちがった途を歩んだであろう。

明一三・一二・八の議員会の議事に次のごときことが書かれている。(『協会報告』二の八)。

「前ニ東京府庁ヨリ中央区改正、並ニ品海築港ノ利害ヲ諮問セラレ、議事ヲ開キ議定スルコト左ノ如シ  
一、築港ノ事 位置ニ於テ必要ノ事業ニシテ且ツ地理ニ於テ妨碍アル事ナシ、因テ実行スヘキノ事



二、中央市区改正之事 現在市街ヲ成スノ地ハ別ニ改正ヲ要セス、郭内本丸西丸ノ北東、正東、東南ノ平地ヲ画シテ市街ト爲シ九段坂下ノ堀ヨリ牛込神樂坂下ノ堀ニ至リ虎ノ門外ヨリ溜池ヲ過テ赤坂喰違外ノ堀ニ至リ之ニ通スル水路淺キヲ鑿リ深キヲ填メ、水運ノ道ヲ開ク可シ、然ルトキハ此城内及ヒ今ノ日本橋区、京橋区、神田区、芝区ハ自ラ市街ノ中央ト成ラン此期ニ至リ中央市区ヲ画定スヘキノ事」

既にみたように東京地学協会の議員にも会員にも別に専門家はおらないが、地学協会という名前によって東京府が諮問したのである。そしてどういふ審議をしたかわからぬが、右のような見様によっては極めて常識的・非計画的な答申を出しているのである。あるいはこの一日の議事で決定したものかもしれない。

これを十年後とくらべるのは無理ではあるが、明治二十二年に東京市が市区改正実施、品川港灣設計につき品川灣・隅田川の水底地質の調査を依頼し、農商務省地質局の鈴木敏（地学会々員）が報告（『地学雑誌』一の一五）しているのは、近代科学である地学の成果の一つで、協会の議員にはこういう発想が果して十年後にできたかどうか。アカデミズムとの接近なしには考えられないことである。

しかし現実には協会はアカデミズムと結び近代科学をとりいれようという考えはなかったから『協会報告』は各期にみたような規程ないし方法によって選ばれた例会演説の掲載誌たるに止まり、その編集人も事務的書記にすぎず、原稿が不足すれば、ロンドン地理学協会誌などから探検的報告を翻訳する人であった。例外はかつて協会の援助を受けたこともあって太平洋諸島を数回調査した田代安定が第四期に編集委員となって各演説筆記の冒頭にその課題の現在の意義を解説しているほか、第二期以後に坪井正五郎（文科大学・人類学者）、第三期以降に神保小虎（北海道庁、後

に理科大学、地質学者)が幹事の側近にいたらしく、ピンチヒッター的な講演をしたり同じ専門の人を紹介しており原稿の不足を補っている。

協会は外国旅行・探検の珍らしい講演を聞き、あるいは賛応することによって会員の社交的機関の要素をもっていたことは前に述べたが、同時にもう一つ、会則のなかに「若干ノ補助金ヲ与フルヲアルヘシ」と書かれている通り地学調査探検に対するパトロンの役割をもっていた。協会が援助した事業をあげれば次の通りである。

明二二・六 太平洋巡回の田代安定に動植物及び人類学調査報告を囑託し一〇〇円を贈与する。

明二五・二 海軍大尉郡司成忠に千島群島占守島における気候・潮流・北光・地理・物産等、地学上に関する報告を依頼。報酬として五〇円を贈る。

明二六・七 吾妻山噴火、会員三浦技師遭難につき、横山又次郎に調査依頼、三〇円支出。

明二七・六 鹿児島県下、種子島・屋久島の地理・地質・気候・物産等の事項を探究し、動植物・地質・鉱物ならびに人類学上の標本を採集せしめるため、西和田久学に一〇〇円支出。

明二八・六 神保小虎に占領中の遼東半島地方の地理・地質・植物学上の探検を囑託し四二〇円を支出。

明三〇・九 帝国大学より派遣の鳥居竜蔵に本会よりも紅頭嶼の探検を依頼。

明三〇・一一 佐藤伝蔵に津軽半島の石器時代堅穴遺跡調査を囑託。

明三〇 この年、報効義会事業報告の出版を補助。

明三二・二 副島八十六にマレー諸島の地理的探検を囑託。

これは必ずしも一貫した方針によったものでもなく、またアカデミズムと結ばなかったから、人選・項目ともに

どこかシロウトくさいところもある。こういう協会にとって地学会を吸収合併したことは、はじめは単に協会の補強であつたであらうが、やがて旧協会員の退潮とともに旧地学会員の進出、したがって東京地学協会そのものの変貌をきたすようになるのである。協会の性格が完全に變つてアカデミズムを前面におしだした時期は明三三・一一、東京地学協会が公益學術法人（社団法人）として認可されたときとみてよろしかろう。

**地学と地理学の交叉** 『協会報告』が近代地理学とつながらないのは、東京地学協会の性格や運営にのみ帰することはできない。明治前半期における西欧学問の導入の仕方にも關係があつたと考えられる。

協会の創立者たちが Geographical Society を地理学協会とせず、地学協会としたことについては、第一章に卑見を述べたが、この地学を当時の人々はどう定義したか。東京地学協会が創立されたころに、東京大学ではドイツ人地質学教師ナウマンに教えられた人々は、博物学の一つ、地球に関する科学として、地球の成因、地球内部の構造、地球表面の自然的諸現象（山岳海洋、地震火山氣象等）を研究する分野を何とよんだか。

「明治十六年五月十五日、竟ニ改メテ本会（博物友会）ヲ地学会ト名ケタリ、抑々所謂地学タルヤ理學ノ一科ニシテ原名ヲギオロギアト曰ヒ、其講スル所地球ノ原始及ヒ其構造ノ沿革ニアリテ、固ヨリ地質ノミニ汲々スルノ學ニアラス、則チ地質学会ト称セスシテ地学会ト称スル所以ナリ、蓋シギオロギアノ字義ハ地学ニシテ決シテ地質學ニアラサレハ、世間已ニ地質學ノ訳字アルニ関セス、以テ斯名ヲ冠スル其意觀ルヘシ、因テ聊カ会名ノ由来ヲ述ルト云爾、明治十六年十月廿三日」（富士谷孝雄、<sup>(40)</sup>地学会会名ノ緣由、学芸志林、第一三卷、明一六）。

(40) 富士谷孝雄は明治一四年東京大学地質学科卒業、一五年東大助教、地質学金石学を担当。一六年『地学要略』を著わす。

日本地質学界初期の研究者（日本科学技術史大系、前掲、一二六頁）。明二六・一二死去。

「地理学と地学との境界入り乱れ……判断するに困り。此の混雑なる風潮日本迄も吹き廻せしものか、有名なる人が寄り集り地理を講ずるを目的として地学協会なるものを設立せしは人の知るところなり（中略）。Geology（地学）を地質学と称すれども訳字の意義、不明かつ不適当……なるは論を俟たず。或人、旧東京大学の時、此の名を廢し地学の名を換用せんとせしに、他に有名なる地学協会（Geographical Society）あれば、矢張改めぬ方宜しからんとの事にて休めり云々」（小藤文次郎、地理学と地学との間違、東洋学芸雑誌、六三号、明一九）

「元来、地学とは Geology にて地球学の意なり、抑、地質学の語は和田維四郎氏の命名にて甚だ穩当ならざる故に、地球学を省略して単に地学とせり。然るに不幸にも地学協会 Geographical Society の連中は、其名称の類似する為め、且又独逸にては地理学 Geography を Erdkunde（地学）と称することあるに拠り……」（小藤文次郎、地学雑誌の由来、前掲、昭五）

また坪井正五郎も「土地の事を研究する地学 Geology と人類の事を研究する人類学 Anthropology」と述べてゐる（貝塚総論、『協会報告』八の四）。すなわち明治一〇—二〇年代には Geology（地質学）を文字の通り Geology（土地の学問）と解釈したのであって、ヨーロッパにおける言葉の歴史的慣用を知らない明治開化期らしい用法であり議論であった。<sup>(41)</sup> 外人教師がいた東京開成学校・東京大学理学部の明治六一—四一年ころには地質学として金石学・石質学・古生物学・構造地質学・応用地質学などが地文学 Physiology とともに教えられて、Dana, Lyell などの教科書が使われていたので（前掲、科学技術史大系、二二—六頁）Geology は語の普通の意味で使われていたのである<sup>(42)</sup>が数年後になって外人教師がいなくなると、右にみたような字義的解釈が行われるようになったのであらう。

(41) 同様のことはイギリスでニュータウンといえば、住宅と工場と商店街とを結合して新たにつくった集落をいうのであるが、

日本では字義通り「新しい町」でただ住宅を造成したところをいう。ヨーロッパの用法は内容を特定しているが、日本的用法は字義的解釈をあてはめたものにすぎない。反対に日本の家具屋でレザーといえば人工皮革に限定するようなこともある。同様のことは Standort は英語の Location であると知れば、当然「位置」と訳したはずだが、Geology を地・学としたように Standort 立・地とした。それがいかに百姓訳であろうと、一旦、學術用語となり官庁用語・法律用語となればもはや新しい日本語である。地理学 Geography は Geo 土地を graphy 描くことであって logy ではないから、科学性はないのだからという風なフリミティヴな所説が明治三〇年代からずっと日本では続いていた。日本のレザーは日本的な意味内容をもつと同様に、Geology, geography はヨーロッパの歴史の上で容認された内容をもつもので、文字の語源的解釈をしても、現実的な意味はつかむことができなかった。

(42) 後年、わたくしは昭和十年代、石井清彦・坪谷幸六・田中啓爾諸先輩の驥尾に付して地学雑誌の編集委員を数年したことがあったが、ある夏の日、外国雑誌でも読もうと独り早く協会へ行つたとき、たまたま岡田武松副会長（中央氣象台長）が来られ、当時、協会をもっぱら実質的に運営しておられた井上禎之助副会長（もと地質調査所長、前旅順工科大学学長）と三人で話したことがある。地学協会のあり方、地学雑誌の内容などについて雑談をかわしているうち、まだ青年客気のころで地質学界の大長老に対して「どうも近ごろの地学雑誌は地質の論文が多くて一向に面白くない」と申したところ、岡田先生も「この通り雑誌のうら表紙には Geographical Journal とあるのだから、地質ばかりでも困るね」と合槌を打たれた。ところが井上先生は「いや、これはジオロジイの会だから」と言われたので全く二の句がつけず、岡田先生も口をつむがれ、ちょっと座が白けた感じだったことを記憶している。

Geographical Society, Geographical Journal をジオロジイ、すなわち地質学の協会・雑誌とは何事かと憤慨したのであったが、前記の富士谷・小藤の所説によって明治十年代の考え方を知ってみると、明治三十年大学卒業の井上禎之助副会長も地質学のジオロジイでなく、Geology すなわち地学という意味で右の発言をされ、あるいはジオ・ロジイと区切って言われたかもしれないと、今思ひ出している。

「地学」の位置づけ　それでは一体、地学とは何であろうか。前にみたように日本の明治一〇—三〇年代に地質学

を地学といったが、これは十九世紀中ごろ、西洋においても鉱物学（金石学）鉱山学（採鉱・鉱床学）は地質学のなかに含まれ、近代地理学はフンボルト・リッターの没後わずかであって、一般にはローマ以来の、日本では江戸時代以来の、土地・国状の記載をもって地理としていたので、科学の目で地表（とくにその自然の状況）をみることは地質学の付属物として発達したのであった。しかしヨーロッパにおいては十九世紀後半、日本においては二十世紀、とくに第一次大戦後になると、長く地質学の庇護下にあった鉱物学・地理学ともに成長し、おのおの独立の分野をもち主張するようになる。

こうなると地学という名は実質のない時代おくれのものになり、学問社会では使われなくなる。<sup>(43)</sup>しかしそれを会名としていた東京地学協会はこういう空気に対処せず、地学会併合後、地質研究者が圧倒的に多くなり、創立当時の鮮烈なヴィジョンを失い、それに代るものを明確にしないまま、地質調査所の一付属機関たるかの観を呈するようになった震災以後の動向は次稿において詳説したい。

(43) 東京地学協会とはちがった意味の「地学」の名が突然、敗戦後、学校教育科目にうかび出て今日に及んでいる。これは占領軍が日本の教育制度を改造するにあたり、新制高校に地理を Human Geography と Physical Geography に分けて前者を社会科に、後者を理科にふくませることにした。新制高校の発足にあたって各科一冊ずつの教科書を文部省、GHQの指導検閲の下につくることになり、どういふ関係か、わたくしが呼び出されて最初の人文地理の教科書を執筆することになったので、最初の説明会で担当CIEのO少佐から聞いたところである。

もしここで Human Geography を人文地理と訳したように Physical Geography も日本で従来使っている自然地理という訳語を使えば、何も問題はなかったのであるが、これが地学をよばれることになったのである。理由は当時、千人を数える

旧制中学の博物科の地質・鉱物の先生方の職の問題がかかっていたので、高師系の先生方の運動があり、文部省に働きかけて地学としたのである。おそらく Erdkunde が頭にあつたのか Earth science を思いついたのかである。Erdkunde は十九世紀後半、ドイツにおいて古来の Geographie に対して当時、新興の自然科学を反映した地理学に対して呼ばれたものであつて、字義としては同意語であるが、例の日本式構成単語の翻訳で特殊の意味をもたせたものである。Earth science は一九三〇年代に合衆国でいわれはじめたもので地球に関する統合的の科学である。

いずれが名称の原形になつたかはわからぬが、現実に新制高校の教育科目としての地学は、命名の動機もあり天文学・気象学・地質学・岩石・鉱物学・海洋学などを並列しただけであつたから、そのような諸専門分野を一人でこなす教師はおらず、したがつて授業は興味なく年々、選択履修する生徒は減少し廃止寸前にいたつたとき、ソ連の人工衛生第一号があがつて、有名な物理学者がこの宇宙時代に地球科学はいよいよ必要であるという意見を出して、定見のない文部省はそれに従い存続がきまつたのである。しかしいかに時代的な錦の御旗をかかげても内容を考慮して真に地球科学の実をあげねば盛んになるわけはない。(新制の大学にも地学という教科ができたが、高校のごとく雑多によせ集めはせず、地質学か気象・気候学か自然地理学か、何かの専門の教授が自己の専門の内容を地学の名において行っているから、一応はなりたつている模様である。その代り大学ごとに地学の内容はかなり異なっている。)

### 近代地理学の未発達

『協会報告』の時代はもちろん、明治末にいたるまでヨーロッパの意味における地理学、とくにフンボルト、リッター以後の近代地理学の思想は東京地学協会の地学、東京大学の地質学者たちの地学のいづれにも含まれていなかった。協会には世界各地の地理学界から雑誌刊行物がきていたことは、毎号の『協会報告』の巻末にあげられているか、これらが果してどれだけ利用されたであろうか。時折、原稿難のときにロンドン地理学雑誌の探検の記事が翻訳された位である。『協会報告』六の五(明一七)に「エルンスト・ベーム氏の訃音」として Herman Wagner の弔文(「ストルマン氏地理通報」一八八四年)を二三頁にわたつて訳しているのは、例外中の例外であ

るが、それを通してヨーロッパの地理学の動向を知るには、訳者も読者も全般的知識がなかった。『協会報告』全巻を通して、地理学という言葉はほとんど見あたらず、普通名詞としての地理という言葉も多くない。すべて地学である。

その地学を協会の創立に関与した人達はどう考えたかについては、明治二五年暮、地学会との合同のあと協会の意見として旧地学会員に説明されたことは

「合併当時、並にその後に至っても、旧地学協会員の予らに暮々言はれたことがある。それは協会は學術研究の一本槍で行く処ではなく、政治經濟・工業・商業等に関する事をも研究する所であるから、それは充分承知してゐて貰ひたいということであつた。」（横山又次郎、地学雑誌の今昔、前掲。）

地学会が純粋の自然科学の研究を志したのに対し、協会はより社会的な要素に関心をもつたことを意味している。しかし関心をもち「研究する所である」といっても、それを学理学問上の課題として追究するということではなく、地球上、各地各国の地理的事情について会員は演説を聞く程度であつたのである。

これはしかし協会を責めるべきことでなく、当時まだ近代地理学の片鱗も我が国に導入されなかつたからである。したがって日本に存在した地理は、退潮しつつある中国風の地誌叙述か、雑多なる外国事情の見聞談・探検談であつたのである。『協会報告』に近代地理学の影響のない理由である。近代地理学が論ぜられるには次の『地学雑誌』の時代をまたなければならぬ。



あとがき 本稿の目的は東京地学協会のあり方を論じたり、いわんや批判することではない。日本の近代地理学の発達のあとをたどるために、明治維新直後からの中国方志の伝統をもつ『皇国地誌』編纂の地理思想につづいて、西歐の地理学協会の空気を吸った東京地学協会の創立者らの『東京地学協会報告』のあり方や思想を見ようとしたものである。調べたり論じ尽さぬ点もあるが、一応、筆を擱き各位先生の示教をまつ。

明治十年代に西洋の地理学協会に身をおき、また当時の西洋の空気にふれた人たちが、新しい地学、自らの耳目で外国を見聞し、それを同志に伝えねばならぬと切実に感じた東京地学協会の創立者たちにわたくしは深い敬意をささげる。それと同時に十年たつとすでに一般事情が変化しており、それに能動的に順応し得なかつた協会の体質を思う。最後に一つの小挿話をつけ加えておこう。

先に述べたごとく会員、大藏卿佐野常民が伊能忠敬の測量事蹟をしらべて例会で演説したのは明一五・九・二九のことであつて、協会が幹旋して建議し、翌年二月、贈正四位の恩典を得た。そこで協会では高輪大木戸に紀功の碑を建てることを議決し、第四年会年報に英仏両文約六百語の建碑募金趣意書をのせている。それから六年余、明二二・一二・一四、芝公園丸山において「贈正四位伊能忠敬先生測地遺功表」の去帙式を行い、大臣・各国公使・枢密顧問官・陸海軍人・帝国大学教授・市参事会員等約五百名を招いて披露した。銅標は辰野金吾の設計、高さ二丈四尺、遺功表の文章は川田剛、文字は巖谷修、日下部東作である。募金及び雑収入三九八二円二七九のうち、銅標の製作者、川口市の工商会社へ三七二六円三七を支払っている。

これはいかにも明治中期的・十九世紀イギリス的であり東京地学協会好みである。伊能忠敬についての佐野常民の

調査聞き書きは『協会報告』にのっているが、その余の調査は後年の帝国学士院で長岡半太郎院長の下で行った大谷亮吉の著書「伊能忠敬」(菊版七六頁、大正六年)しかない。昭和十九年に銅鉄回収のため遺功表が撤去されたが、敗戦後の経済復興とともに協会はこれを再建することとし、苦勞して財界の世話で数百万円を集めて、もとの場所にややモダンな碑を立てたのも東京地学協会的であった。金石に彫刻して記念するという以外に考えがなかったとみえる。大谷亮吉の著書は測量学的測地学的方面からのみ説いているから、地図学的にこれを研究するか、あるいは歴史でなく現実に測量測地あるいは地図等の今後の発展の基金をつくるか、今も昔も建碑以外にもっと方法があったのではないかなどというのは、こちらの貧乏ぐらしのせいかもしれない。しかし少なくとも明治の建碑の大らかさはイギリス的であるといつてよからうし、また四分の三世紀を隔てて会員構成が完全に変わったのに、氣風というものは変らぬものであるという感を深うする。自戒の一端とするとところである。

(六八・一二・辰日)

補注 一 (七二頁) 明治一三年の東京府庁の中央市区改正および品海築港の諮問は、経済学者田口卯吉の提案を渋沢栄一らが賛成し、東京府知事松田道之に採択されたものである(石塚裕道、明治期における都市計画——東京について。東京都立大学都市研究会編、都市構造と都市計画、四九〇頁)。この計画は明治一七年から府知事芳川顕正によって新たにとりあげられ、内務省・元老院の議を経て明治二一年に条例が公布され、三二年に完成するが(同書、四九〇—四九四頁)、このときには東京地学協会はまったくタッチしておらぬようである。ただし明二一・三・二六の元老院における審議には七四人の議員のなかに、協会の有力会員である長岡護美が出席している(とくに発言はなかったようである)。小倉庫次、東京市区改正条例前後(都市問題 五五卷、昭三九)に引用。

補注 二 (七八頁) 日本のいわゆる地学、といわれるもの、その言葉のなかに意味するものには、地質学のウェイトが大きい。

明治初期の「地学協会」的発想ではないが、協会そのものの変遷が明治三十年代以後、地質調査所と関係を密にできたことから、日本的な地学が何とほなしに成立したのであろう。ユネスコに *Geology and related sciences* という分類があり、ICSU に *International Union of Geological Sciences* というセッションがあつて、これを無難作に「地学」と訳してゐる。補注 三(七三頁、七四頁) C. O. Sauer の見解に *Recent development of cultural geography in Recent Developments of Cultural Sciences*, ed. by E. C. Hayes, 1927 (pp. 145-212), ヨーロッパにおける十九世紀の地理学は探検によつて発展したので、他の学問と異なり、あるパトロンの下にあるノン・アカデミックな協会によつて進められたのであるといふ。それは探検家のクラブであり、太平洋諸島・アフリカ・中央アジア・極地方などへ探検隊を派遣し、あるいはそれを援助した。協会はよい図書館をそなえ、雑誌あるいは探検記を刊行し、顕著な探検事業にはメダルや賞金を与えた。

このような協会として、パリに *Société de Géographie* は一八二一年、ベルリンに *Gesellschaft für Erdkunde* は一八二八年、ロンドンの *Royal Geographical Society* は一八三〇年を先頭として、以後、全国各地に設立され、一八七九年創立の東京地学協会は世界で二十何番目にあたる。

これと相前後し、あるいはややおくれで大学に地理学の講座が設けられる。まず十七世紀のヴァレニウスの一般地理、十八世紀のカントの自然地理をもつて、その国の思想界に地理学の地位の高かつたドイツで、一八二〇年にリッターがベルリン大学で地理学の講座を開いたのをはじめとして、七〇—八〇年代にはドイツの各大学に地理学講座ができ、フランスは一八八〇年からそれに続き、イギリスは一八八七年にはじめてできた(翌年、オクスフォード大学に)。日本は明治三十五(一九〇二)年に東京帝国大学、理科大学にはじめて地理学講座がおかれた。

これらの国々、とくにドイツでは協会と大学とが、それぞれ探検と研究に重点をおきながらも、相互に扶けあい結合したために、双方に発展したと思われる。しかし日本の場合は、大学(地質学教室、地質学会)と東京地学協会は長く、ほとんど手を結ぶことがなかつたといえよう。これらの事情については次の機会に述べたい。